真・恋姫無双～白夜叉大乱～

マルボーロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫無双～白夜叉大乱～

【Ｎコード】
Ｎ６５９４Ｍ

【作者名】
マルボーロ

【あらすじ】
坂田銀時。かつて白夜叉と恐れられた伝説の侍である。
現在は万事屋を営みながら、日々を漫然と過ごすプー太郎だが、その剣は
未だ衰えることを知らず、彼の中で静かに眠っている。
そんな彼が今世界を、時を超え、三国世界で大暴れする！！
ユーザーでなくても、感想書けるようにしました！ドンドンやっちゃってください！！

第一訓：作者が作品にからむと大抵叩かれる（前書き）

まず、お詫びから申し上げます。お気づきの方もいらっしゃるでしょうが、作者
一回ミスしてこれを短編で出しています。ミスりました。純然と失敗しました。
しかし、それでもめげない作者を応援してくれる心優しい方はお楽しみください。

第一訓：作者が作品にからむと大抵叩かれる

侍の国。
僕らの国がそう呼ばれていたのも昔の――――

「オイィィイイ！！一体いつの解説しようとしてんだ作者ァァアア！！分かってるるから！この小説読んでるみんなは、もうそんな設定聞きあきてるからぁぁぁあああ！！」

「うわっ！びっくりした～。どうしたんです？銀さんいきなり大声出したりして」

「発情期アルか？発情期なのかコノヤロー」

「神楽ちゃん、それ俺のセリフゥゥウウウ！！」

はい、天パがお見苦しい所をお見せいたしました「おい作者、てめぇ後で覚えてろよ！銀魂のキャラクターは原作者もぶっ飛ばせんだからな！」……すんません。

……ええっと、コホン。気を取り直して、ここは現在の天人に支配された地球の中心地とも呼べる都市、江戸の一角にある、とある美術館。
皆さんお解りかと思うが、最初にいきなりワタクシ作者の解説を妨害してきた天ｐぶべらっ！！ちょ！すいません！ちょ、まって！やる！やりますから鼻フックだけは！！

……はぁ、はぁ。……ええっと、どこまでいった？……そうそう、最初にワタクシ豚のクソつまらない解説にツッコミを入れ

てくださった我らが主人公、
銀色の日本刀のように美しい輝きを放つ髪をなびかせ、黒の服と雲柄の着流しをハイセンスに着こなした我らが坂田銀時様率いる、伝家のツッコミ職人、志村新八
宇宙最強の戦闘民族・夜兎の末裔にしてチャイナな美少女、神楽ちゃんは、今夜この美術館の警備をするためにわざわざ出向いてこられたので候。

……これでよろしいでしょうか？え？口調が気持ち悪い？しばらく話かけるな……。はははは！ホントすいませんねぇぇぇぇぇぇ！！（泣）

「あれ？銀さん、どこ行ってたんですか？」

「あ～？ちょっと肥え豚を調教しに」

「ちょっとぉぉぉぉぉ！！あんた一体、ホントどこ行ってきたんですかぁぁぁぁぁ！！！」

「発情期アルか？発情期なのかコノヤロー」

……はい、おふざけはこの位にしてそろそろ話を進めていこうと思います。え？作者は大丈夫なのかって？ははは、ナンノコトヤラ？

「ちょっとぉぉぉおおお！！なんか作者がおかしいんですけど！！なんか必死で過去をぬぐい去ろうとしてるんですけどぉぉぉおおお！！」

「あ～ったく、うっせ～な～。そんなもんほっときゃいいんだよ～。どうせ関係ないから、作者はただ淡々と、俺達の活躍を綴るだけのキーボード打ち機だから、ず～っとカタカタやってるだけだから」

「銀ちゃん！私そんなのよりタマゴ割り機がいいアル！タマゴ割り機買ってきてヨ！」

「神楽ちゃん！？ダメだから！！そんなのとか言っちゃダメだから！！この作品一応作者によって成り立ってるから！グダグダでも一生懸命だから！」

「安心しろ神楽。キーボード打ち機はタマゴ割り機と兼用だ」

「本当アルか！！キャッホォォォオオイ！！」

「作者ぁぁぁあああ！！！」

深夜の美術館前にも関わらず、万事屋一行は今日も元気に騒いでいた。「あ、作者もう無視したよ。これ以上関わらない方向で話を進めていく気だよ」……ほっとけ。

「はぁ、全く。……ところで銀さん、なんか今日いつもよりテンション高くないですか？最初の解説へのツッコミだっていつもは僕が入れるところなのに……」

「そういえばそうアル。なんか一瞬、銀ちゃんがダメガネに見えたネ」

「オィィイイイイ！！ダメガネってなんだぁぁぁああ！！メガネに罪はねぇだろうがぁぁああ！！」

「はぁ～？何言ってんの、お前ら？銀さんいつも通りだからね？銀さんはいつも通りSだからね？銀さんをいつも通りじゃなくさせたら大したもんですからね？」

「いや、何回いつも通り言ってんですか……」

「……やっぱりおかしいアル。具体的に言うと昨日、テレビで『恐怖！美術館に眠る魔の秘宝達！』を見たあたりからおかしいアル」

「……」

「え？なに？その目？なに？違うよ？銀さん、アレだから。別におかしくないから。さっきから言ってるよね？もう～！なんなの！そんなに銀さんをおとし入れたいの？」

「……あれ？なんか銀さんの後ろに」

ズサァァ！

「「……」」

「……いや、アレだからね、ほらアレ。ちょっとピクシーがいたから」

「いや、どんな言い訳ぇぇぇぇぇ！！？」

「見苦しいアル。もうネタはあがってんだよ。もうこのネタもやり尽くしてんだよ」

「だぁぁかぁぁらぁぁあああ！！違ぇって言ってんだろうがぁぁあああ！！別に、怖がってねぇしぃぃぃぃ！！夜の美術館なんか、夜の学校と比べたらスライムとミノタウロスだしぃぃぃぃ！！」

「いや、無理しなくていいですから。僕たちは分かってますから、銀さんがこういうの苦手でも、僕たちは銀さんの味方ですから」

「そうアル！銀ちゃんが例え漏らしても、気にせず接するネ！三メートル以内に入らなければ」

「オイィィイイ！！お前ら信じる気ゼロかぁぁぁああ！！いいよ！！もう銀さん一人で言ってやるよ！！誰が好き好んでガキのお守なんかするかってんだ！！」

「あ！ちょっと銀さん！……行っちゃった」

「だれがお守する側だと思ってんだ、あの天パ！」

こうして銀時は新八と神楽の心優しい（？）気づかいも無視して、一人真っ暗な美術館に乗り込んでいったのでした。あれ？これ死亡フラグ？

「ちょっと作者、なに怖いこと言ってんですか？」

そして、二人の出番もここまででした。

「「はぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！？」」

第一訓：作者が作品にからむと大抵叩かれる（後書き）

いかがでしたでしょうか？面白ければ感想お待ちしております。
あと、最後に付け足した通り、新八、神楽、その他の銀魂キャラはしばらくでてきません。出す予定はありますが、かなり先dうお！
なんだ！？いきなり番傘が！？

第二訓：世界で一番凶悪な光は、異世界への扉（前書き）

はい、やってまいりました第二訓！今回はあの美少女達がようやく登場！

第二訓：世界で一番凶悪な光は、異世界への扉

月明かりが差し込む美術館。銀時は頼りない懐中電灯の光を揺らしながら……

「あぁんなことういいなぁ！！でぇきたぁらういなぁああ！！あんなユゥメ！こんなユゥメ！……」

なぜか大声でド〇えもんの歌を歌いながら歩いていた。……見苦しいにも程がある。

「アンアンアン！！！！とぉおてもでゅあい好きぃぃいいい！！こわくぅぅう無いぃぃいいい！！！！」

銀時はとうとう歌詞を変えてまで主張しだした。……一応警備の仕事なんだけど

とこのように銀時が、それこそ深夜の美術館という独特の空気をぶっ飛ばさんばかりの大声で歌いながら歩き、ようやくルートの中ほどまで来た頃だった。

「ある～ひぃぃいい！！森のな……」

ジリリリリリッ！！

「　！　」

突然、美術館中に警報音が響き渡った。

「うおっ！ビビったー……。いや、いきなりデカイ音が、聞こえたからビビったんであって、そういうアレではないけど……つーか何？泥棒？やべ、聞かれてたかな？今の聞かれてたかな？」

と銀時がそんなことを気にしていると

ドンッ

「てっ！」

「　！　」

なんと銀時が曲がろうとしようとしていた角から、泥棒らしき少年が飛び出してきたのだ。

「おいおい！都合のいい展開だな！おい！」

「チッ！あの美術館中に反響していた歌は、逆に場所を特定させないためのものか！」

「そして、思ックソ聞かれてるぅぅぅうううう！！！」

当たり前ですね。

させて「そこを退けぇぇぇえええ！！」

「退けるかぁぁぁあああ！！状況的にも、社会的立場に置いても、てめぇをここで逃がす銀さんじゃありません！！退いてほしいならお前の記憶中枢を置いていけぇぇぇえええ！！」

「できるかぁぁぁぁぁぁ！！」

泥棒は叫びながら銀時に蹴りかかった。しかし、もちろんその程度でやられる僕らの銀さんではない。

ガキッ！

「！　木刀！？」

「おいおい、あぶねぇじゃねぇかコソ泥さんよ～。やりあおうってんなら、まず『ごめん下さい』って言えって、母ちゃんに教えられなかったのかよ」

「んなこと教える母ちゃんなんていねぇよ！！」

泥棒は、銀時のよく分からないボケにツッコミながらも、素早く間合いを取り、再び蹴りを繰り出す。

しかし、銀時はそれを、わずかに体を傾けるだけの動きでかわし、瞬時に泥棒の懐に入りこむ。

「甘ぇよコソ泥。記憶中枢置いてけねぇつうなら、豚バコにでも入居してなぁぁぁぁぁぁ！！」

「　！！　」

銀時の木刀がすさまじい威力を持って泥棒にふり降ろされた。

しかし、ここで予期せぬ事態が起こる。なんと泥棒が、ツルツルの美術館の床で足を滑らせ、銀時の木刀が、泥棒が盗んだと思われる鏡に、クリーンヒットしてしまったのである。

「「あ」」

パリィィイインン

見事に砕け散った鏡を見ながら銀時と泥棒は同時に声を漏らした。

「オィィイイイイ！！ちょ、これ、オィィイイイ！！割れちゃったじゃねぇかぁぁぁああ！！なにコレ俺のせい？違うよね？絶対違うよね？」

「……貴様、なんてことを」

「なに俺のせいにしようとしてんだビチグソヤロォォォオオ！！」

銀時が泥棒に掴み掛からんばかりの勢いで吠えていると

ピカァァアアア

「なっ！？」

「ちっ、もう始りやがったか！」

なんと割れた鏡から光が溢れ出したではないか。

「おいおい！なんだってんだ！おい、ビチグソ！こいつはどうなってんだ！」

「ビチグソじゃねぇよ！クソ天パ！……飲み込まれろ、それがお前に下る罰だ」

「はぁ！？てめぇふざけんのもいい加減にしろよ！罰ならてめぇが勝手に受けてろ！童〇がぁぁぁあああ！！」

「この世界の真実をその目で確かめるがいい」

「聞けぇぇぇえええ！！！」

そうこうしている間にも光は銀時を飲み込んだ。

そして、銀時の意識はそこで途絶える。

――――――　東方より来る流星。この乱れた世に平安をもたらす
銀色の使者を天よりもたらさん　――――――

――――――アレ？空が真っ青だ。

――――――アレ？空が青いのは当たり前じゃね？

――――――アレ？ていうかこれ原作でもやらなかったっけ？

――――――アレ？これ作者がやりたいだけだったんじゃねーの？

――――――アレ？つーか……

「ここ、どこ？」

銀時が目覚めると、そこは見渡す限りなにもない、正真正銘の荒野だった。

「……え～っと……あ～あれか～、うんアレだなこれ。夢だなコレ」

銀時よ。気持ちは分かるが、そのネタは行数稼ぎにしかならないぞ。

「にしても、どんだけ殺風景な夢だよコレ。温水（ぬくみず）さんでも、もうちょっと派手な夢見るぞコレ」

おい、それは温水さんが殺風景って言ってんのか。謝れ、温水さんと全てのハゲの皆様に謝れ。そして俺も謝れ。

「もう、こんなもん二度寝だ、二度寝。ったく、新八も早く起こせっつーんだよ。埃まみれなんだよ、銀さんの髪が残さず、土埃をからめ取ってんだよ」

じゃあ、起きろよマダオ。

「あと、作者殺す」

あ、やべマイクはいってた。ポチっと……ふぅ、さて

じゃあ、この『まぁ、ダメだわこの、オッサン』略してマダオのことは放っておいてぐ、ぐわっ、なにをする止めあああああああ！

「ん……？」

「？　どうしたの？愛紗ちゃん」

「あ、いえ、どこかから声が聞こえた気がしたので……」

「ん～？何も聞こえないのだ～」

と、作者1号と銀時がアホな掛け合いをしていた時。銀時よりちょっと離れた所に3人の少女がいた。おっと、自己紹介が遅れました、ワタクシ作者1号に代わってナレーションを務めさせていただく、作者・リターンズです。え？結局作者なんだろ？違います、作者・リターンズです。ワタシはただ淡々と作業をこなすキーボード打ち機です。これでいいんですよね？銀時様？え？銀時でいい？了解しました、これからは銀時で打たせていただきます、銀時様。……え？どうかされました？え？なぜ謝るのですか？ワタシニハナニガナニヤラ。

まぁ、私のようなキーボード打ち機の様子などはさておき、ナレーションを再開したいと思います。

「……さて、確かこの辺りでしたね、流星が落ちたのは」

「う～んと、その筈なんだけど～、何にも無いねぇ～」

「でも、確かにこの辺りに落ちたのだ！鈴々もちゃんと見たのだ！」

何もない荒野で3人の少女たちがキョロキョロとあたりを見回している。
黒髪で意志の強そうな少女、ピンクの髪で見るからにおっとりとしていそうな少女、そして、その少女達より頭2つ分くらい背の低い、赤髪の快活そうな女の子。
3人とも遠目にも分かるほどの美少女である。

「う～んと……ん？あ！愛紗ちゃん！ちょっと、こっちこっち！」

「！　ちょ、桃香様！お一人で先行されては危険です！」

「どうしたのだ～？」スタスタ

「鈴々！ちょ、なんでお前は言ってるそばから、私を素通りするんだ！」

「あ、鈴々ちゃん！ほらあそこ！
」
「あれ？無視？2人とも無視ですか？ちょ、待って、ホント、待っ、私も行く～！！」

……あれ？これ、けい○ん？

場面は戻って銀時さm……もとい銀時。ん？なんですか？その目は？ワタシハナニモオカシクナイ！

「お？ねぇ、兄貴こんなとこで寝てる奴がいますぜ」

「ほ、本当なんだな」

「ん？ほう、なんだぁコイツぁ？珍しいもん着てんじゃねーか」

なんと銀時は盗賊らしき男たちに囲まれていた！

「くく、こんなとこで寝てるなんざぁマヌケな野郎だ！」

盗賊の一人が銀時の顔を覗き込みながら、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる。

「マ、マヌケなんだな」

その盗賊の言葉に大柄な盗賊が、どもりながら呼応する。……ていうかお前がいうな、饅頭に目と鼻と口だけ書き足したような顔しやがって。

「おいおい、そう言ってやるな。きっとコイツは俺達『黄巾党』に寄付に来てくれたんだよ」

すると、その二人の盗賊の後ろから兄貴と呼ばれた盗賊が、ほかの2人の3倍は憎たらしい笑みを浮かべながら現われた。

「あ～！なるほど！さすが、兄貴！」

「さ、さすがなんだな」

2人の盗賊は、その兄貴の言葉に感心したように声をそろえた。

……ていうか、なにがさすが？

「そーだろ、そーだろ！ぐはははははは！！」

兄貴と呼ばれた男はその言葉に気を良くしたのか、大声で笑いだした。

2人の盗賊もそれに合わせるように一緒に笑いだす。

「「「ぎゃはははははは！！」」」

3人の下品な笑い声が、何もない荒野に響き渡った。その時

「おい……」

「「「　！　」」」

盗賊たちの足元から声がかかった。

3人の盗賊は、その決して大きくはないが、なぜか耳に響くその低い声に驚き、笑うのを止める。

すると、今まで地面に寝転んで、バカみたいに眠りこけていた男がゆっくりと起き上がってきた。

「ぎゃーぎゃー、ぎゃーぎゃーうるせぇんだよ。目覚ましなら、結野アナボイスの目覚まし時計買ってこいや」

銀時は目の前の盗賊たちに、少しも動揺することなく言った。
「……っ！て、てめぇ！なに訳のわからねぇことぬかしてやがる！！」
完全に寝ていたと思っていた目の前の男が突然起き上がり、驚いていた盗賊たちがようやく慌てながらも銀時にメンチをきった。
しかし、銀時はそんなことどこ吹く風で、めんどくさそうに欠伸した。
「ふ、あぁ～～！あ～、よく寝た。よく寝過ぎて、なんか首痛い」
「こんなとこで寝てたら、そりゃそうなるは！」
「あ～？こんなこと～？てめぇ、いくら安宿だからって、この俺のマイホームを侮辱するたぁどういう要件だコノヤロー」
「どこに！？どこにマイホームなんてあるの！？ていうか、まいほーむってなに！？」
「あ？おめ、マイホームっていやぁ……あり？ここ、どこ？」
「や、やっと気づいたんだな……」
「あ～、なんだよ、まだぱっさん起こしに来てねぇのかよ。使えねぇメガネだな、おい」
「おい、ぱっさんって誰だ」
「もう、勘弁してくれよ～。とうとう夢の中の人たちがコミュニケ

ーションをはかってきてんだよ、ものすごい三下臭がするオッサンたちがコミュニケートしてきてんだよ～」

「違うからね？俺達、現実だから、ちゃんと存在してるから。てか、三下ってどういうことじゃゴルァァアアア」

銀時のあまりのボケっぷりに、律儀に漫才していた三下……もといチンピラ達も「黄巾党だからぁぁぁぁぁぁ！！」……とにかくオッサン達も、とうとう腰に下げていた剣を引き抜く。「聞けよ！」しかし、銀時はまだ夢だと思っているのか、未だに手で顔を覆っている。

「おい、てめぇら。この舐めた野郎に俺達の恐ろしさを教えてやれ」

「へい！兄貴！」

「か、覚悟するんだな！」

盗賊たちの兄貴が、手下の男たちに合図する。

男たちは素早く銀時を挟み込むと、勢いよく銀時に斬りかかった。

「「死ねぇぇぇぇぇぇ」」

しかし――――

ドカッ！バキッ！

「なっ！」

盗賊の頭が気づいた時には、手下たちは悲鳴もあげることなく昏

倒していた。
そこには、先ほどまで死んだ魚のような目で訳の分からないことをぼやいていた銀髪の男が、木刀を片手に佇んでいた。
「ったくよ～……なんで夢の中で、ザコキャラ感満々のヤロー共に囲まれてんだよ、俺ぁよ～。なんで、ピチピチウハウハのハーレム主人公とか、オカシナナ王国への道が開かれねぇんだよ～」
銀時がフラフラと盗賊の頭に近づいていく。盗賊の頭も慌てて剣を構えるが、剣先が震えており脅しにもならない。
「なんで、夢の中まで銀さんの夢は、打ち砕かれなきゃなんねぇんだよ……つーか」
銀時が、頭の剣先の鼻先でピタリと止まる。頭はそこまでが限界だった。
「う、うあああああ！！」
情けない雄たけびをあげながら、頭が銀時に斬りかかった。しかし――
「てめぇは誰なんじゃぁぁぁあああああ！！！」
「ぐわぁぁぁあああああ！！」
その声だけを残して頭は、空の彼方の星となった。すると

パチパチパチ……

銀時の後ろから拍手が聞こえてきた。

「あ？」

銀時が、それに反応し気だるげに振り返ると

「すっご～～い！！あっという間に倒しちゃった～！」

「見事な手前でした」

「すごいのだ！」

なんか3人の美少女がいた。

「……俺はいつの間にロリコンになったんだ？」

第二訓：世界で一番凶悪な光は、異世界への扉（後書き）

感想、誹謗、中傷、お待ちしております……やっぱ感想だけで

第三訓：読者の目を気にしていたらいいものは書けない（前書き）

恋姫ファンの皆様ごめんなさい

第三訓：読者の目を気にしていたらいいものは書けない

銀時は目覚めると、見渡すかぎりの荒野で気を失っていた。
現実逃避し二度寝をする銀時。しかし、その時、銀時の前に３人の美少女が現れる！

「「「……あれ？俺たちは？」」」ｂｙ忘れられたチンピラトリオ

（おいおい、どういうことだ？こりゃあ。なんで俺の夢ん中に、美女じゃなくて美少女が現れるんだよ！銀さんはロリコンじゃありませんよ！）

銀時が突然現れた美少女たちに、自らの深層意識を疑い始めていると、少女たちはそんな銀時のことを放ってなにか相談し始めた。

「ねぇ、ねぇ！愛紗ちゃん！鈴々ちゃん！もしかして、この人が天のおつかいさんじゃないかな？」

「桃香様、おつかいではなくみつかいです。それだと、はじめてみたいになりますから」

「？　愛紗がなに言ってるのか、よく分からないのだ」

（……天の御使い？なに、それ？天野さん家のサトシくん？）

銀時が、少女たちが言った天の御使いという単語に、頭の中でボケていると、少女たちの中で、ツッコミ役的な存在っぽい黒髪の少女が、銀時をジロジロと観察し始めた。

「確かに……着ているものや、先ほどの太刀筋、何よりこの銀髪……合致するところはありますが……」

「でしょ！でしょ！」

黒髪の少女が、眉間にシワを寄せながら銀時をジッと観察する。ピン髪の少女はそんな少女にしきりに相槌をうっている。

（……なぁにコレ？なんで銀さん天然記念物みたいな扱いになってるの？そりゃ最近ジャンプ主人公として扱いが適当じゃない？とか思ってたけど……）

銀時がいい加減この少女たちの態度にキレかかっていた、その時だった。今まで、ほかの2人を放って物珍しそうに、銀時の周りを歩き回りながら見ていた赤髪の少女がポツリと言った。

「でも、このおじちゃん死んだ魚みたいな目をしてるのだ。ヤル気のかけらも感じられないのだ」

「「　！！　」」

「……（ピキ）」

……天然って怖いね。

「鈴々！！本当のことを言ってはいかん！！」

「愛紗ちゃん、愛紗ちゃんも口に出ちゃってるよ！」

黒髪の少女が、慌てて鈴々の口をふさぐがもう遅い。ていうか意味なし。

「おい、こらてめぇら……」

案の定、3人の背後から、今まで話の中心でありながら一切会話に入れなかった男が低い声を上げた。

「「「　！！　」」」

その声に3人は心臓を鷲掴みにされたような錯覚に陥る。恐る恐る振り返ると、そこにはなんかどす黒いオーラを放つ銀時がいた。

「さっきから黙って聞いりゃ好き放題言いやがって……」

「あ、いや、そのこれは……」

銀時のあまりのプレッシャーに、うまく声がでない。
そして、銀時はいつもの死んだ魚のような目では無く、鋭い獣のような視線で桃香たちを睨みつけ。
そして――――

「せめて、おにいちゃんと呼べ！」

（（（……あ、そこなんだ））））

備考：銀さんの死んだような魚の目は、いざという時に煌めくから問題なし。

「……ったく……銀さんはまだ２０代だっつーの、現役ピチピチだっつーの！……それともなにか？加齢臭がするってか？ねぇ？銀さんお父さんの枕みたいな臭いするの？」

「だ、大丈夫だよ！全然そんな臭いしないって！……嗅いだことないけど」

「そ、そうですよ！ほら！鈴々も！」

「そ、そうなのだ！おじちゃんは、お兄ちゃんなのだ！」

「……ねぇ？この子は慰めてるの？それとも傷口抉ってるの？」

銀時が、自らの体臭について本格的に落ち込んでしまったので、3人は必死で励ました。

その甲斐あってか、一部不適切な表現があったものの、なんとか本来の調子を取り戻した銀時は改めて3人に向きなおる。

「で？お前らは、なんな訳？」

銀時が、いつも通りの気だるげでヤル気のない調子で問いかけた。3人はようやく元気（？）になった銀時に、内心胸を撫で下ろしながらも、元気よく答えてくれた。

「あ、はい！わ、私、劉玄徳といいます！それで———」

「関雲長。我が主、劉玄徳様が一の家臣」

「鈴々は、張飛なのだ！」

「……は？」

はい、三者三様実に明朗快活に答えてくれました！

（いやいやいやいや！！ちょっと待てよ！作者なに普通にスルーしようとしてんの？アレだろ？なんかおかしいだろ？この子たちなんて言った？劉玄徳？関雲長？張飛？お前アレだろ？それって三国志に出てくるアレだろ？アレがあーしてあーなるから総合すると、武将だろ？銀さんそれくらい知ってますよ？一般常識だもの、銀さん社会人ですもの！）

「……？どうかしました？」

「へ……？」

銀時が、今しがた少女たちがした自己紹介に頭を抱えていると、自称・劉玄徳のピン髪の少女が心配そうに顔を覗き込んできた。その顔はやっぱりどう見ても、少女であり、それこそ目なんか吸い込まれそうなくらい澄み切っていて……

（っていうか銀さんを、そんな純粋な目で見ないでぇぇぇぇ！！なんか焼けるぅウウウ！！心の中に横たわるどす黒いものが浄化されるぅぅぅぅぅ！！）

「あ～！いやいやなんでもありませんよ～！何でもない！うん。だっておかしいもの、本来オッサンだものこの子たち」

「……いや、なに言ってるんですか？私たち普通に女の子ですけど……」

「バカ野郎！んなこと見れば分かるっつーんだよ！！銀さんナメんなよ！！」

「なんで！？」

銀時が、混乱のあまり自称・劉玄徳を、なんかよく分からないテンションで打ちのめしていると、それを見かねたのか自称・関雲長が間に割って入る。

「ちょ！一体どうされたというんですか？」

関雲長は、劉玄徳を庇うように立つと、銀時を少々きつい目で見る。しかし、銀時としても今かそれどころではない。

「あ～も～、だからアレだよ。そう！江戸がどこにあるかしらねぇか？」

銀時が、イヤな予感と混乱しか存在しない頭をしぼりながら、なんとかそう質問した。しかし……

「えど？……すいません、聞いたことがないのですが……それは天の国の名前ですか？」

「……」

（オイィィイイイイ！！なんでこの子たち、江戸のことしらねぇとか言うんだよぉぉぉおおお！！江戸だよ？今や地球の一丁目と恐れられるあの江戸だよ！？）

「オイオイ、冗談言うなよ。アレだろ？君たちコスプレって奴だろソレ。なりきっちゃってんでしょ？アクターきどりなんでしょ？」

「こ、こすぷれ？……すいません。あなたが何を仰っているのか私達には分からないのですが……」

「……マジか？」

「……すいません、まじとはなんですか？」

「……」

銀時はそこまで聞くと、一度絶望したような顔をして、うなだれたしまった。

「……どうしたのかな？愛紗ちゃん。なんかまた黙り込んじゃったんだけど……お腹痛いのかな？」

「いや、それ何歳児ですか桃香様。……おそらくまだ自分の状況が整理できていないのでしょう……」

「おじ……お兄ちゃん大丈夫？」サスサス

「いや、だから鈴々違うから、気持ちは分かるけど背中さすっても治らないから」

劉備たちが三者三様ながらも、それぞれにそんな銀時の身を安じていると、それが功を奏したのかなんとか立ち上がる銀時。

「……ふぅ、しゃあねぇ……。てめぇらがウソついてる風にも見えねぇし、どうやら俺はまた厄介なことに巻き込まれちまったみてぇだな……」

「あの……もう大丈夫なんですか？」

「ああ、手間かけさせちまったな」

まだ、心配そうにしている劉備に笑いかけながら、銀時が言う。その言葉に、3人はようやくホッと息をついた。

「じゃあ、改めて自己紹介だな。俺ぁ銀時、坂田銀時だ。銀さん、又は銀ちゃんでも可だ」

「……私は、劉備。性は劉、字は玄徳。真名は桃香だよ！」

「わが名は、関羽。性は関、字は雲長。真名は愛紗です」

「鈴々は、張飛なのだ！え～っと、性が張で、字は翼徳！真名は鈴々なのだ！」

こうして、今、坂田銀時は世界を越え、3人の美少女と化してしまった伝説の武将達と、長く大きな戦いへと身を投じていくのであった。

「さて……とりあえずタイムマシンはどこにある？」

「「「……たいむましんって何！？」」」

備考：銀さんは困ったら、とりあえずタイムマシン

第三訓：読者の目を気にしていたらいいものは書けない（後書き）

いかがでしたでしょうか？ちょっと桃香達を銀魂っぽく改造しちゃったんですけど……。はい、もうこの後書きを書いている時点で恋姫ファンからの罵詈雑言が目に浮かぶようです。それでも、僕はあえて言いたい！銀魂最高！！！

第四訓：ラブコメのお約束は下手すりゃ死亡フラグ（前書き）

ちょっと投稿スピードが速すぎる気がします。
でも、話はクソゆっくりです。

第四訓：ラブコメのお約束は下手すりゃ死亡フラグ

「いや～、悪かったな。さすがの銀さんも、異世界旅行は初めてだったもんだから、ちょっと取り乱しちまった」

「ううん、全然大丈夫だよ！私達の方こそあなたのことを放って、勝手に話を進めちゃってごめんなさい」

「私からも謝罪させていただきたい」

「ごめんなさいなのだ」

「いや、いや。お互い分かりあえたみたいで何よりだわ！それが何よりだわ！……ただな」

「「「……」」」

「とりあえず……暴力はいけないと思うんだよ、銀さんは」

ここは、銀時が倒れていた場所から、しばらく歩いた所にある小さな街にある、とある定食屋。
そこで銀時は劉備達と向かい合うように座っていた。なぜかボコボコになりながら。

「も、申し訳ありません！」

「全く愛紗は乱暴者で困るのだ！」

「途中からは鈴々がやってただろ！」

「ちょっと2人とも！やっと落ち着いて、ここまで来れたんだから蒸し返しちゃダメだよ！」

「トドメはお前だったけどな、デカメロン1号」

「あう……だ、だっていきなり抱きついて来たから……ていうかめろん？」

「そうだ！貴様、どさくさに紛れて桃香様にハレンチな行いを……」

「おめぇらに吹っ飛ばされたんだよ！！」

そう、なぜ銀時が鼻に詰め物までしているかと言うと、端的に言ってリンチであった。

～回想～

「……で、つまりまとめると、こういうこと？この国は今なんやかんやで腐ってて～、そしたら、なんやかんやで黄巾党っていう、

チンピラみたいな奴らがわんさか出てきて～、お前らは、それをなんやかんやしたくて～、そしたら俺がなんやかんやで、天の御使いって奴な訳か～？」

「ふぅ、やっと落ち着いてくれましたか……。ていうか、ものすごいザックリ感が否めない理解の仕方ですよね？」

銀時が賊の２人を殴り倒し、頭の男を空の彼方に吹っ飛ばした荒野。

銀時が、ようやくタイムマシン禁断症状から回復したことで、関羽達は自分達が知りうる限りの、この世界の事情を銀時に話すことができた。銀時はそこまで理解すると、再び顔を手で覆ってしまう。

（……はぁ～～～～、ったくよぉ～～～～。なんで俺はこう毎度毎度、厄介極まりないことに、こうも巻き込まれんのかねぇ～～～～……。あれか？呪われてんのか？絶対そうだろコレ、この状況も、俺の髪も全部呪いのせいだろ？チクショー、かけた奴ぜってー殺す）

と銀時が落ち込むと共に、謂れのない決意を固めていると

「……あ、あの、えっと元気をだしてください！」

銀時の全貌から、か弱くて、しかし精一杯の優しさで満たされた声がかけられた。

銀時が顔をあげると、そこには劉備達が心配そうな顔しながら銀時の様子をうかがっていた。

「いきなり、違う世界に来ちゃったりして大変だと思うけど、でも！私達が力になるから！」

「私も協力します。桃香様と共に、あなたを必ずお守りいたしましょう！」

「鈴々もなのだ！」

劉備達は、皆一様に銀時をまっすぐに見つめながらそう言った。それは、年端もいかない少女達の言葉ではあったが、それゆえに純粋で迷いのない言葉だった。

銀時はそんな少女達の目を見て、何か懐かしさのようなものを感じた。そう、それはまるで……

（……何考えてんだかな）

「……1ついいか？」

銀時は今一瞬浮かんだ情景を、心で自嘲的に笑いながらも、少女達に言葉をかける。

「？　なんでしょうか？」

突然、雰囲気が変わった銀時に、内心少し驚きながらも劉備が首を傾げながら問い返した。

銀時は、その言葉を聞き取ると、ゆっくりと口を開いた。

「お前ら……この世界を……この国を変えたいってことは……“戦争”をするってことでいいのか？」

「「「　！　」」」

“戦争”。劉備達にとって、意識することはあっても、実際にはほとんど経験したことのないもの。
今まで、死んだ魚のような目をして、ふざけたことばかりをまくし立てていた男が放ったその単語に、劉備達は少なからず動揺した。

しかし――――

「……そう、です……でも、それは！この国で困っている人達がいるから！私達はその困っている人達を助けたいから！」

「そうです……、人殺しが正しいことではないことは分かります。しかし、大義のため、民のため、この国に巣食う下郎共を、討ち払うことこそが、この国を救う道となるのです！」

「悪い奴らを鈴々達がぶっ飛ばしたら、この国の人達もきっと皆幸せになるのだ！」

それでも、少女達は迷うことなく答える。それは、信じているから。自分達の道に、明日があることを信じているから。それは、よく言えば正義であり、悪く言うならば……過信であった。
……かつての銀時がそうであったように。

「……そうか」

銀時は劉備達の言葉を聞き終わると、一瞬苦しげな表情になったが、すぐにいつもの気だるげな表情に変わっていた。

「はぁ～～、ったく、若いってのはいいね～。立派だわ、ホント」

銀時は、先ほどまでの真剣な雰囲気を一変させると、そんなこと

言い、今度は茶化すように手近にあった関羽の頭を、乱暴に撫で上げた。

「！！／／／なっ、なにをするんですか！馬鹿にしないでください！！」

関羽は突然のことに、顔を真っ赤にさせながら暴れるが、銀時はどこ吹く風っといった風に、関羽の拳があたる前にヒョイと手をどかした。

「わ～、愛紗が真っ赤っ赤なのだ～」

「本当！愛紗ちゃんか～わ～い～い～！」

「鈴々！桃香様！や、止めてください！あと、そのノリなんですか！？」

そんな様子に、劉備と張飛も緊張がほぐれたのか、真っ赤になった関羽を面白そうにはやし立てる。

関羽も止めておけばいいのに、ムキになって2人につっかかる。場の雰囲気が一瞬で明るくなったようだった。

しかし――――

「ただな……」

銀時は言葉を続ける。少女達に教えるために。かつて――――

「理想と現実ってのは、いつか区別がつかなくなるぞ」

自分がそうであったから。

「……え？」

銀時が言った言葉が、引っ掛かり思わず問い返してしまう劉備。しかし、次の瞬間には銀時は再び、その全てを見透かすかのような紅い瞳を収めいつもの濁った瞳へと戻っていた。

「さーて、じゃあ、とりあえずどうしますかね～。つーか腹へったな～」

銀時は固まる劉備達を放って、一人そんなことを言うと歩きだそうとする。その時だった……

ガシッ

「へ？」

銀時の足首を何者かが掴んだのだ。いきなり掴まれたことでバランスを崩す銀時。ゆっくりと前方に倒れていく。銀時は倒れそうになりながらも、自分の足元を確認する。するとそこには

「よ、よくも……なんだな」

先ほど、殴り倒したはずの大柄な盗賊が自分の足を掴んでいたのだ。

（！　チッ、脂肪でガードしやがったのか！？）

銀時は、倒れながらもなんとか体勢を立て直して、木刀を抜こう

とするが、その前に……

ポヨンッ

「「……へ？」」

２つの声が重なった。片方はもちろん銀時である。では、もう一方は？銀時はすさまじくいやな予感がしながらも、恐る恐る顔をあげる。なんか、ものすごい柔らかい感触を味わいながら。

「～～～～～～／／！！！」

そこには顔を真っ赤にしている劉備がいましたとさ。ベタ展開乙。

「……激アツ」

「桃香様に何さらしとんじゃぁぁぁぁぁ！！白髪がぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ぶべらっ！！」パシッ

銀時は、その瞬間に般若もガクブルな顔になった関羽に殴りとばされました。

その時、何か手にかすった気がしたがキリモミ飛行中の銀時にはそれどころではない。

「はっ！申し訳ありません！つい、いつもの癖で！」ヒュッ、バキッ「ポッ……！」

銀時を殴りとばした関羽は、そのまま追撃してきそうな勢いであ

ったが、そのすぐ後正気に戻ると、慌てて謝り始めた。その間にも、手早く盗賊の意識を、刈り取っているからさすがである。
銀時も、2メートルほどふっとんだ所でようやく墜落し、なんとか一命を取り留めた。

しかし――――

「ぐふぅ……。っ痛～～、オイオイ、今の俺じゃなかったら死んでt「せぇぇぇぇぇぇい！！」ガフッ！！」

「鈴々！？」

なんとか痛み耐えながら、起き上ろうとしていた銀時にまさかの追撃！
なんと今まで傍観していた張飛が、突如銀時にマウントポジションで殴りかかったのだ。

「ちょ、まっ、ぶっ、がっ、げふっ、ぐはぁぁぁぁぁ！！」

「ちょ、止めろ鈴々！どうしたというのだ！！」

「この野郎！！てめぇ、鈴々の髪飾りがコレ、ちょ、汚れちゃったでしょうがぁぁぁぁぁぁ！！」

どうやら、関羽が銀時を吹っ飛ばした時に偶然、
張飛の髪飾りをはたき落しちゃったみたいですね～、あの猫の。

「は！？お前、俺、そんなの知らない「そぉぉぉぉぉぉい！！」ごぼぇぇぇぇぇぇ！！」

銀時が謂れのない罪を弁解しようとするが、なにぶん相手は伝説の猛将。そんなスキも与えない、容赦のない連撃だ。銀時危うし！このままでは、異世界記４話目にして終了か！？……ダメェェェェェ！！作者的にもそれはダメェェェェェ！！

「ま、待て！鈴々！お前がその髪飾りを大切にしているのは分かったから一旦止めよう！というか、コレむしろ私のせいだから！！これ以上やったら、死んじゃうから！！」

とそこでようやく関羽が、中年虐待を繰り返す張飛を止めてくれた。ありがとう！関羽！さすが、この小説のツッコミ役だ！張飛も「愛紗が言うなら……」と渋々ながら銀時から離れる。銀時は迫りくる吐き気に耐えながら、なんとか脱出に成功した。

しかし、銀時の不幸属性を侮ってはいけない……

「ぜぇ、ぜぇ……し、死ぬかと思った……銀さんジャンプ始まって、初のヒロインに殺される主人公になるとこだったよ、ったく……あ、殴られ過ぎて目眩が……」

「きゃっ……！」ドサッ

「「「……あ」」」

状況を説明しよう。銀時あまりの激痛に足を滑らせる→前方に、今までのやり取りをオロオロしながら見ていた劉備→衝突→銀時、ピン髪美少女に馬乗り。説明終了。

「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

ドゲシッ！！

「股間！！！！」

……銀時終了。南無三。

～回想終了～

第四訓：ラブコメのお約束は下手すりゃ死亡フラグ（後書き）

もう鈴々がどうしようもないことに……。これからは、少し自重したいと思います。

第五訓：女の子にたとえどんなこととされようとも漢は笑って受け止めろ（前書き

今回は無理やり気味なギャグでまとめたり、食事シーンすっ飛ばして、ようやく
物語が動いてきたなってところまでこぎつけました。
……うん、これからはちゃんと書けるようにします、すいませんでしたっ！！

第五訓：女の子にたとえどんなこととされようとも漢は笑って受け止めろ

「……考えてみればよく平然としてられるよね？俺」

「うう……ごめんなさい」

銀時は、自分がされたあまりの仕打ちに、今更になって怒りがこみ上げてくる。正直やり返したいという気持ちもない訳ではないが……生憎ここは、昼も半ばも定食屋である。

「……ったく、もういいよ。俺が油断してたってのもあるし、このまんまここで泣かれたら、なんか俺がいじめたみたいになるしね？」

「ほ、本当ですか～～～！」

銀時のなんか打算入りの言葉に劉備はまるで、初めてのおこずかいをもらった小学生のような目で喜んだ。もう、ホントに澄み切った青空のような目で。

「……あと、そう言う目で見るの止めてくんない？そんなキレイな目で俺を見ないで。もっと濁ったイカスミみたいな目で俺に接してくれない？もう、なんか、痛い……」

「あなたの痛覚は、どこで機能しているんですか」

銀時、無垢なる瞳に免疫ゼロ。あと、愛紗ナイスツッコミ。

しかし、劉備はそんな銀時に葛藤などどこ吹く風で、こんなことを

言ってきた。

「じゃあ！じゃあ！坂田さん！私達のご主人さまになって下さいますかっ？」

「……は？」

銀時は、思わず聞き返した。そりゃそうだろう。出会って何時間の１０代美少女にいきなり“ご主人さま”なんて呼ばれれば。

「……何言ってんの？」

「ですから！私達のごしゅｊ「いや、聞こえないとかじゃないから」

銀時は、それでも何かの間違いだろうと思いもう一度聞き返すが、劉備は相変わらず瞳をキラキラさせながら、同じことを繰り返そうとするだけだった。すると、そんな銀時の様子を見かねたのか、劉備の隣で同じように真剣に銀時を見つめていた関羽が口を開いた。

「先ほど、説明したとおりです。今あなたは、自覚はないかもしれませんが、天の御使いという立場なのです。これは、間違いないでしょう。我々３人、恐れながらそれなりの力はあります。もちろん志も……。しかし、やはりそれだけでは限界があります。そこで、あなたという訳です」

「……なるほどね」

つまりこういうことである。この３人、将来的にはそれこそ世界中に名を轟かせる武将達（美少女化しているが）であるのだが、如何せんこの時代では、まだその辺にいる町娘と、そう変わらない立

場らしい。そんな小娘がいくら呼びかけようが、大した成果は上がるはずもない。そこで、この少女達は天の御使いという、知名度抜群の広告塔を利用しようと言うのだ。

「すご～い！さすが愛紗ちゃん！それが言いたかったんだよ、私は！」

「さすがなのだ！」

「いや、桃香様そこで喜ばれてしまっては……というか鈴々いたのか？」

「ひどいっ！？」

一応リーダーのハズなのに、代わりに説明されても全く動じない（むしろ喜んでいる）劉備。

大丈夫なのか未来の英雄３人組……、あとちらっと出てきたチンチクリンは単に話に入り込めなかっただけです。「ひどいっ！！！」

何はともあれ、関羽の説明によって事情は理解した銀時。しかし、疑問がある。

「つーかよ～、俺がその、“ご主人さま”にならなくても、協力してるって体（てい）にしておけばいいんじゃね？」

「「「え？」」」

銀時が、素朴な疑問を口にすると、今までかしましく騒いでいた劉備達が、突然一斉にこちらを見た。あまりに動きが合いすぎていて若干気味が悪い。

「なに、言ってるんですか？ご主人さまは、ご主人さまでしょ？」

「ふざけるのもいい加減にしてください」

「頭大丈夫か？」

「え？何？なんでそこまで言われるの？つか、顔怖っ！！」

備考：恋姫無双において、蜀ルートはご主人さまが絶対ルール

「それじゃあ、よろしくお願いしますね！ご主人さま！あ、あと私のことは、真名で桃香って呼んでね！」

「桃香様が許されるのならば、私のことも愛紗とお呼び下さい、ご主人さま」

「鈴々も、鈴々って呼んでいいのだ、銀ちゃん！でも今はあえてこう呼ぶのだ！ご主人さま！」

「……もういいや」

こうして、銀時は正式に劉備……もとい桃香達のご主人さまになったのでした。
ちょうどその時。

「はい、おまちどうさま！ご注文の桃饅……」

定食屋の店員が、セイロを両手に持ちながらにこやかにやってきた。

「お、きたきた。ふぅ～、腹減ったぜ～」

「あれ？いつの間に注文なさっていたんですか？」

「ていうか、桃饅ってなんか想像と違うなぁ～～」

「鈴々も食べたいのｄ「１０個です」

「「「多っ！！そして、デカ！！」」」

備考：糖分王、坂田銀時とは俺のこと

「なんですかコレ！？顔くらいありますよ！？というか、こんなの品書きにありましたか！？」

「あ～、そりゃ裏メニューだから」

「なんでアナタは、来て半日も経っていない異世界の定食屋の裏メ

ニューを知ってるんですか！？」

「あ、でもおいしい～」

「あ！てめ、コラ！誰が食っていいって言ったんだ！！オラァ！！」

「あ～！桃香ズルイのだ！鈴々も食べたいのだ！！」

「だぁかぁらぁぁあああ！！食うなって言ってんだろぉぉおおお！！」

「聞けって言ってんだろうぉぉぉおおおお！！」

2人とも実は言ってない。

～数十分後～

「いや～、おいしかったね～」

「お腹いっぱいなのだ～」

「そうですね。小さな佇まいですが、味は一級品でした」

「そうだな～、ホント満足だわ！……皿洗いしてなきゃな」

「「「……」」」

銀時達は皿洗いをやらされていた。

「つーかさ～、お前らなんな訳？出会って半日経ってない異世界漂流者にたかろうとするって、ハゲ鷹でも、もう少し良心的だわ！」

「うう……だ、だって天の国って言うくらいだから、お金いっぱい持ってると思って……」

「そういうの、ホントダメだからね！聞いたこと無い？だろう運転じゃなくて、かもしれない運転で行けって！」

「面目ありません……あと、私達が天界の言葉を知るはずがありませんし、たぶん天界にいても聞いてないと思います。たぶん年齢的な意味で」

「あのさぁあ！？天界、天界ってさっきから言ってるけど、違うからね！？俺が居たとこは、そんなクリーンな場所じゃないからね！？欲望とゴミが渦巻くドブのようなとこだったからね！？それでも、俺はたくましく生きてました！！」

「はぁ～～、期待ハズレなのだ～」

「鈴々ちゅわぁぁああん？俺言っとくけど、君に一番キレてるからね？何メニューの端から端まで、制覇してんだよ！！神楽のイスでも狙ってんのか？コラ！！」

「てめぇら、うるせぇえよ！！喋くってないで、手ぇ動かしな手ぇ！！」

「「「「了解です！女将！！」」」」

……あれ？説明いらない？そうですか……

銀時達は、それから黙々と皿洗いをし続ける……、しかし元来坂田銀時というのは結構グチっぽい性格であり

「はぁ～、ったくよ～、俺って確かこの世界では救世主（メシア）的存在なんじゃないの？なんで、イエス様が皿洗いしてんだよ……やべ、想像したらしっくり来ちゃった」ボソボソ

「ご主人さま！静かにしてください！また包丁投げられますよ！」ヒソヒソ

「だ～いじょ～ぶだって、だいたいさ～……」ゴニョゴニョ

と、また懲りずにボソボソと、文句を垂れ流し始めていた。

その時だった

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンッ！！

「「「　！！？　」」」

「ひゃあ！！ゴメンナサイ！！」

「ご主人さま！違います！女将じゃありません！これは警報です！……というか、ひゃあ！！って……」

「あんた達！！」

「！　女将さん！？」

「アンタ達も急いで逃げる準備しな！！奴らが……黄巾賊が襲ってきやがったんだよ！！！」

第五訓：女の子にたとえどんなこととされようとも漢は笑って受け止めろ（後書き）

いかがでしたでしょうか？こんなに恋姫無双のキャラをぶっ壊してるのに、未だに誰もツッコんでこないことに違和感を覚える今日この頃です。

第六訓：しめる時しめときゃいいんだよ（前書き）

すいません、今回黄巾戦を期待していた方。今回は戦闘シーンはありません。
その前に、どうしても銀さんに気合入れ直してほしかったので……
……
その代りと言ってはなんですが、今回はあの二人がちょびっと出ます。
では、どうぞお楽しみください。

第六訓：しめる時しめときゃいいんだよ

ここは、銀時達が皿洗いをやらされていた定食屋から、大通りを上ってしばらく行った所にある城。
今ここで、この街の若き太守である公孫賛拍珪は、突然の黄巾賊の来襲に急ピッチで兵の準備を整えている最中だった。

「おい！まだ兵の準備は整わないのか！？」

「はっ！只今完了いたしました！！」

「よっし！全く、なんだって奴ら突然襲ってきたんだ？情報では……いかん、いかん。私がこんなことぼやいていても何にもならないじゃないか！うん！」

公孫賛は、事前に入手していた情報との食い違いを思わずぼやきかけるが、すぐに首をふると、ムンッと気合を入れ直す。

「そうだ！私はこの街の太守なんだ！私が弱音を吐いていたら士気にも影響が……」

「公孫賛さまぁぁっぁぁあああああ！！！兵の出兵準備整いまっしたぁぁあああ！！！いつでも出陣できますっっっっ！！！！！」

「……いや、いいんだよ。皆ヤル気ならそれでな？はは……」

公孫賛さんの兵士は意外とヤル気満々マンでした。

「あ、そうだ！ところで、趙雲の奴はどこへ行った？アイツにこそ先陣をきらせたいのだが……」

気を取り直した公孫賛が、ふと思いだした、いつも掴み所が分からない客将の居場所を部下に尋ねる。

「はっ！趙将軍でしたら、先ほど『あの程度の賊軍、私1人で十分だっ！！』とヤル気満々に出て行かれましたっ！！」

「ヤル気満々っていうか、あの子何してんの！？え？一応私が大将なんだよね？私が命令する立場なんだよね？ていうか、貴様も止めろよ！！」

「公孫賛様っ！！我らも、趙将軍に続きましょうっ！！」

「「「オォォォォオオオオオオ！！！」」」

「ねぇ！？私っていらない子！？そうなんだろ、チクショー！！」

公孫賛軍、士気は最高潮。

一方こちらは銀時一行。

先ほどの定食屋から、出た銀時達は、今は大衆の避難の邪魔にならない場所で、顔を突き合わせながら相談していた。

「……なんだか、大変なことになってきてるみたいだね……

……」

桃香はそう言いながら、自分の胸の前でギュッと手を握る。遠目では判断しずらいが、わずかに肩が震えていた。

「ったく、面倒なことになっちまったなぁ〜〜」

銀時は、こんな状況でも、いつもと変わらず気だるげに髪をポリポリかいていた。

「……まさか、義勇兵を募る前にこのような事態になってしまうとは……」

愛紗も、普段の倍くらい眉間にシワを寄せながら、険しい表情をしている。

「今からでも、一緒に戦いたいって、ここの太守に言ってみるのだ！」

鈴々が、そんな沈んだ空気を吹き飛ばすかのように、ハイハイッと手を上げる。

「おお、そういやぁ、ここの大将は、桃香の知り合いだったんだっけ〜？」

銀時が、食事時に聞いた豆知識を思い出すかのように言った。

「うん、幼馴染だよ！でも……」

「いくらそうであったとしても、この混乱した状況の中で、それは

あまりに無謀でしょう。もう、すでに今頃は出陣の準備も出来上がっている頃。邪魔以外の何者でもありません」

「え～そうか～？なんか、昔の思い出話とかで緊張をほぐしながらいいんじゃない？例えば、３組のタカシくんとか好きだったよねぇ～とか、あのラブレター渡せたの～とか、
あのことは、まだ誰にも言ってないから～とか」

「脅迫じゃないですか！！止めてください、そういうの！ホント怖いんですよ！若気の至りで、片づけられることばかりじゃないんですよ！！」

「うん、やっぱりそう言うのもダメだと思うんだよね？ノリで行けるほど甘くないって言うか……、あと、タカシくんじゃなくて、リンくんでした」

「桃香様も悪ノリしないでください！！」

人々の怒号と悲鳴が響き渡る街の一角で、銀時達はいつも通りでした……あと、愛紗。実は、ノリでも結構行けそうだぞ？

「はぁ～、しょうがねぇ～。ここで、グダグダやっててもどうしようもねぇし、いざとなったら飛び入りで参加するか……」

「あ、ちょっと！ご主人さま！」

銀時の脅迫作戦も倫理的な観点から却下され、いよいよ手が無くなってしまった。
すると、話していても埒が明かないと判断したのか、銀時はそう言ってスタスタと大通りの方に歩いて行ってしまった。

「いけません！そんな無茶な……」

「無茶でもなんでもよ～、もう約束しちまったからな」

「　！　」

銀時の背中に慌てて声をかけた愛紗が、その言葉にハッとなって固まった。

悲鳴と怒号が飛び交う街。
そんな中、定食屋を飛び出した銀時達は、そんな街の様子に一瞬驚いて固まる。

『オラ、どけぇぇぇ！』

『きゃぁぁぁあ！』

『メイ！メイ、どこなの！？』

『うわぁぁあぁん！うわぁぁあぁん！』

様々な人の声が、混ざり合い、大きなうねりとなって街をかき回していた。

「ほら！ボーっとしてないで、アンタ達も逃げるよ！」

すると、驚いていた銀時達の後ろから声が上がった。
振り向くと、定食屋の女将が、小さな子供の手を引きながら、城へ避難しようとしているところだった。

「母ちゃん！父ちゃんは！？」

「っ！父ちゃんは仕事だから、別々だよ！」

「……大丈夫なの？」

「……当たり前だろ！」

小さな子供が、女将の手を引きながら、泣きそうな顔をする。女

将は一瞬不安そうな顔をするが、すぐに気丈に笑って見せた。……
……やっぱり、どこの世界でもオバチャンは最強生物だ。銀時達も、そんな親子の姿を見せられ、混乱していた頭が序々に整理されてきた。

その時だった……

「邪魔だ！ボーっとしてんじゃなねぇ！！」

「うわっ！」

女将達の後ろから、男がぶつかってきたのだ。その拍子に子供が、尻餅をついて、倒れてしまう。

「てめぇぇえ！！何すんじゃ、ボケコラカスゥゥウウ！！」

女将は、一瞬呆けたような顔をするが、すぐに伝説の戦国武将も思わず敬語になってしまう鬼の形相で、男に吠えた。男もその形相に一瞬ひるむが、この状況で頭に血が上っているのか、すぐに顔を真っ赤にさせながら、女将に吠え返した。

「う、うるせぇ！この非常時にんなとこで、ウロウロしてんのが悪いんだろう！！」

「ふざけんじゃねぇよ、テメェェェエ！！大の男がこんくらいのことで、ピーピー泣きわめきやがって！！ガキか、コラァァアア！！」

「な、んだと……うおぉぉおお！！」

男は女将に言われたことが、図星だったのかとうとう殴りかかっ

てきた。しかし……

「止めてください！！」

男の拳が、振り上げられた瞬間、女将と男の間に少女が割り込んだ。

「！　桃香様！？」

「桃香！！」

「危ないのだ！」

銀時達は、桃香の思わぬ行動声を上げる。しかし、桃香はそんな銀時達の声を無視して、女将と男の間に立ち続ける。

「な、なんだテメェ！」

男は突然登場した少女に、若干動揺しながらも、それが年端もいかない、か弱そうな少女だと分かると、俄然声を荒げる。しかし、桃香はそんな男のことを真っ直ぐに見つめながら、ゆっくりと語り出した。

「……不安なのはわかります、怖いのも分かります。私も今、怖くて怖くて、足が震えてしまいそうです、腰が砕けてしまいそうです。でも、それでも……」

桃香は、一度呼吸を整えると再び男を見据えた。ただ、純粋に、真っ直ぐな瞳で

「私の前で、誰かを傷つけることは、絶対に許さない！！！」

自分の魂をぶつけた。

「　！　」

「桃香様……」

「桃香お姉ちゃん……」

その言葉に銀時は目を見開き、愛紗と鈴々は、桃香の名前をつぶやく。自分達の主の名前を。

男は、桃香の言葉に一瞬ひるんだように、顔をしかめるが、それでも、拳をおさめようとはしなかった。

「黙れクソガキィィイイ！！」

男の拳が進路を変え、正確に桃香の顔面へと吸い込まれていく。桃香は、よけようとせず、ギュッと目をつぶり、次に来るであろう衝撃に備えた。しかし……

「お前が黙りな、チンカス野郎」

「ごはぁっ……！」

それは、来ることはなかった。男が、桃香を殴ろうとした瞬間に、銀時が横から男を殴りとばしたのだ。男は、そのまま地面にゴロゴロ転がると、ピクピクと震える。桃香は、突然のことにポカンとしながら、銀時の背中を見つめていた。

「よう……見せてもらったよ」

銀時は背を向けながら、桃香に声をかける。

「お前の……魂をな」

銀時がゆっくりと、桃香に振り返った。桃香は、そこで息を飲む。銀時の瞳が、今までの濁ったものではなく、真っ直ぐな、とても綺麗な紅い瞳だったからだ。桃香は、その目に一瞬見とれてしまっていた。しかし、その後聞こえた声で、桃香は意識を戻される。

「くっ、て、めぇ……」

銀時に殴られた男が立ち上がってきたのだ。おそらく、銀時が完全に意識が飛んでしまわないように調整したのだろう。桃香の後ろにいた女将は、それにハッとして、子供を自分の所に抱き寄せた。男は血走った目で、銀時達を睨むが、よほど綺麗にはいったのかフラフラしている。それでも、その空気は今にも掴みかかってきそうなものであった。そして……

ジャキッ

「下がれ、下郎」

気が付くと男のもとには、愛紗が青龍炎月刀を男の首筋に当てながら、今にも男を斬り殺しそうな目をしながら、立っていた。

「3つ数える内に消えろ。さもなくば、その首はねる」

全く抑揚のない声で、愛紗は男にそう言い放った。

「1つ……」

「ひ、ひぃぃぃぃ！！」

男は、愛紗のそのあまりの殺気に、ほとんど転がるようにしながら逃げていった。

「「「「「……」」」」」

「ふん……はっ！桃香様ご無事でしたか？」

男が逃げだしたのを確認すると、愛紗は今までのオーラが嘘だったように、桃香に駆け寄っていった。

（（（（（（……こ、怖ぇぇぇぇぇ！！））））））

今まで生きてきた中で、あのお姉ちゃんが一番怖かったｂｙとある少年

「世話になっちまったね」

愛紗の恐怖から、ようやく回復した女将はそう言いながら銀時達に頭を下げた。

「お～、まぁ、気にすんな」

銀時はその言葉にも、適当にヒラヒラと手を振るだけであった。

「お礼に、皿洗いもあと1時間分だけで勘弁してあげるよ」

「いや、もうそこはタダでもいいんじゃない！？」

やっぱりオバチャンには敵わないようだ。

「さて、そろそろ行かないとマズイね。あんた等も一緒に……」

「あ～、悪ぃけど、それあんた達だけで行ってくんない？」

「「……え？」」

銀時の手を引こうとする子供の手をやんわりとかわしながら、銀時はそう言った。

「……ご主人さま」

桃香達は、銀時の意図をくみ取ったのか、銀時の言葉に疑問の言葉は言わない。

「な、なんで？だって早くしないと城門が閉まっちゃうよ？」

銀時の言葉に今まで、女将の隣で手をつないでいた子供が、慌てたように銀時に詰め寄りながら言った。

「ちょっと野暮用ができちまってな」

しかし、銀時はそんなこと、どこ吹く風でという風に相変わらずヘラヘラと適当に受け答えをする。

「申し訳ありません。我々には、果たさなければならない使命があるのです」

「心配してくれて、ありがとうね」

「大丈夫なのだ！ちょ～っと行ったら、すぐに帰ってくるのだ！」

桃香達も銀時の後ろにつき、それぞれ言葉を言う。

「……あんた達、まさか」

そんな銀時達の様子に、女将は何か察する所があったのか、表情を険しくする。

「……さてと、じゃあ急がねぇと、いけねぇんだろ？だったら早くいきな。世の中は、個人の意思に関係なく回っていくんだぞ～」

銀時は、そんな女将の様子に気づかないふりをしながら、さっさと背を向けて歩き始めてしまった。

「あ！銀ちゃん、待ってなのだ～！」

「ご主人さま、勝手に行かれては困るとなんども言っているでしょう！」

「あ～！みんな待って～！」

桃香達も、突然歩き出した銀時に慌てながらも、その背中に付いていく

「ま、待ってよ！」

しかし、最後に行こうとした桃香の手を子供が取った。

「なんで行っちゃうの！？危ないよ！殺されちゃうよ！」

子供は必死に桃香の手を引きながら、懇願するように叫んだ。桃香はそんな子供の言葉に、フッと柔らかく微笑むと、子供の目線までしゃがんで、優しく言葉を紡ぎだす。

「君は、優しいんだね。ありがとう、心配してくれて……、でもね？大丈夫だよ？確かに、私1人には何の力もないけど……」

桃香は言葉を紡ぐ、優しく、包み込むように。

「だって、私には……皆がいるから！」

桃香は笑顔を見せる、とても綺麗で、人を安心させることができる笑顔を。

「っ……！」

子供は、その笑顔を見て、何か熱いものが目から溢れそうになったが、恥ずかしくなって、なんとか顔をふせることで隠した。

「お～い、ショタコ～ン！逆ナンしてねぇで早くこ～い」

「なっ／／！違うから！そんなことしてないから！ていうか、しょたこんって何？」

銀時が、何時まで経っても来ない桃香に痺れを切らして、なんかとんでもないことを言いながら呼び寄せる。桃香は、それに顔を真っ赤にさせながら首をかしげるという高等テクをしながら答えた。

「……」

そんな桃香を子供はじっと見つめ、何かを納得すると、スッと手を放した。
桃香は、一瞬驚いたような顔で、手と子供の顔を見比べると、最後にフッと口元を緩め

「ありがとう！」

そう言って、銀時達の元に走っていった。
すると、桃香が銀時達に追いつくか、追いつかないかというところで、女将から声がかかった。

「おい！あんた等！」

桃香が追いつくのを確認して、進もうとしていた銀時が振り返らずに立ち止まる。

「……ちゃんと、代金支払いに来るんだよ」

それだけ言うと、女将も子供の手を引き、銀時達に背を向けて歩きだした。

「……ったく、どっかのババァみたいな事言いやがって」

そして、銀時も歩きだす。たわいもない約束を胸に刻みながら。

「……ちゃんと店残しとかねぇと、払いに行けなくなるだろ。人任せにすんのは、嫌いでな」

銀時は女将と子供との、そんなたわいもない約束を思い出しながら、愛紗に振り返らずに歩きだした。

「……全くご主人さまは、素直じゃないね～♪」

すると、今度は愛紗の背後から桃香がやれやれと首を振りながら、銀時のあとに続いた。

「全くその通りなのだ。カッコつける年でもないのに、痛々しいのだ」

今度は、鈴々がニヤニヤしながら銀時の隣に並んだ。

「……全く、好きにしてください」

そんな3人の背中を見て、愛紗は言っても無駄だと悟ったのか、溜息をついて後に続いた。

「……うるせぇ、クソガキ共」

そして、銀時達は4人並ぶと、街の入り口へと続く大通りへと踏み出した。約束を果たすために。

しかし……

ヒヒーーン！！

「へ？あべしっ！！」ドボゴッ

銀時が大通りに踏み出した瞬間だった。

突然、城の方から猛スピードで、走ってきた馬に銀時は見事に踏まれたのだ。

「「「ご主人さまぁぁあああ（銀ちゃぁぁあああん）！！！」」」

突然、人身事故に見舞われた自分達の主に、桃香達が慌てて駆け寄る。

「おや？もう、市民は全員避難したと思っていたのだが？」

すると、馬に踏みしめられ、地面に倒れ伏した銀時の上から平然とした声がかけられた。

桃香達が見上げると、そこには白い露出度の高い服を着て、愛紗や鈴々と同じような長刀を持った水色の髪の美少女が、馬から降りてくるところだった。

第六訓：しめる時しめときゃいいんだよ（後書き）

いかがでしたでしょうか？桃香が、男前に書けていたら幸いです。
あと、今回少し皆さんから募集をかけたいと思います。
今回、公孫賛と趙雲が出てきましたが、この二人の銀時の呼び方を募集します。
二人ともしばらくは、部下にはなりませんからね。気が向いたらで結構ですので、
よろしくお願いします。

第七訓：駆け込み乗車は止めましょう（前書き）

まず、最初に言っておきます。まだ、戦闘シーン入りません。

……すいません！さんざ期待させておいたのに、マジすいまっせぇぇえん！！いやね、言い訳すると、星さんがしゃべるしゃべる。原作でもそうだったけど、星さんと会話するとまるで話が進まないし、作者ごときの腕だと、そのまま脱線事故おこしそうな勢いで話しそらすんですよ。いやマジで。

ということで今回は戦闘フェイズは星さん出ずっぱりです。

第七訓：駆け込み乗車は止めましょう

前回のあらすじ！

銀時が馬に蹴飛ばされました（爆）。

「き、貴様ぁぁあああ！！我が主に何を……」

愛紗がいきり立って、その美少女に刃を向けるが、美少女は涼しい顔をしている。

「おいおい、止してくれ。私は、きちんと城門が閉じるのを確認してから、馬を走らせていたんだ。理不尽にここで斬られる筋合いはない」

「うっ……！」

愛紗の気迫にも微動だにせず、自分の言い分を淡々と述べるこの美少女に、愛紗は何かおかしい気がするが、一瞬おされてしまう。

「愛紗ちゃん！落ち着いて！この人おかしいよ！明らかに、自分の過失を人になすりつけようとしているよ！」

「そうなのだ！銀ちゃんも、だろううんてんじゃなくて、かもしれないうんてんで行けって言ってたのだ！」

しかし、そう何人もだまくらかすことはできなかったようで、桃

香と鈴々は、未だ涼しい顔で愛紗と対峙している美少女にツッコむ。
「はっ！そ、そうだ！そんな言い訳が効くとでも思っているのか！！」
愛紗も、ようやく気付いたのか再び美少女を睨みつけながら、刃を向けた。すると、美少女は
「そうだな、私が悪かった。ゴメンナサイ」
今までが何だったのかと思うほどあっさりと頭を下げた。
桃香達は、その態度に「へ？」と間抜けな声を上げてしまう。
「いや～、私も急いでいたとはいえ、本当に申し訳なかった。お詫びに、今度メンマを送ろう」
「あ、いえいえ、こちらこそ、ご丁寧にどうも……あと、なんでメンマ？」
美少女は顔を上げると実に丁寧かつ、フレンドリーな謝罪をつらつらと述べる。
そんな美少女のペースに桃香達もいつしか乗せられて、愛紗も青龍刀を下ろしてしまっていた。
「じゃあ、私も急ぎの用があるので、申し訳ないがこれで……」
「あ、はい。お気を付けて～」
こうして、美少女は颯爽と去っていったのであt……

「おかしいいいいいい！！！」

ですよね。

「「「ご主人さま（銀ちゃん）！！？」」」

「おかしいだろ！どう考えても！なんで、俺思いっきり踏みつけられてんのに、スルーされてるの！？」

「おや、もう意識が戻ったのですか、丈夫なお人だ」

「そんで、その顔止めろぉぉおおお！！なんでそんな涼しい顔で、俺を見れるの！？お前の顔面にはクーラーでも、取り付けられてんのか！？」

「ははは、本当に元気なお方だ。バカ〇ンの父君ですら病院入りしたというのに」

「なんで、お前はパロディネタがつかえるっ！？」

銀時は、今さっき馬に後頭部を蹴られたにも関わらず、実に元気いっぱいに美少女につっかかっているが、美少女はそんな銀時の剣幕にもやはり涼しい顔でのらりくらりとかわしている。

「ご、ご主人さま……！？大丈夫なんですか！？」

しかし、下手をすれば死んでいたということも確かなので、桃香は恐る恐る銀時に聞いてみる。

「ああっ？大丈夫な訳ねぇだろうが！！今ので俺のＨＰが２００ぐ

らい削られたわ！！」

「……元気そうですね」

「おや、２００とはすごい！私でも、ＨＰは１０００しか持っていないのに！」

「だから、なんでお前はついてこれてんの！？」

銀時は、ダメージを負ったと主張しているが、どうやらギャグ補正対象だったらしい。

「ははは！全く面白い人だ！」

その後も、美少女と実にリズミカルな漫才をした銀時。美少女は実に楽しそうに笑いだしてしまったが、銀時はもううんざりしていた。全く、掴み所のない少女であった。

「笑い事じゃねぇよ、ったくよ～……つーかお前「趙子龍」……あ？」

銀時が、もうこの美少女にツッコむのを諦めて、何でこんな所に馬に乗って来たのか問いただそうとしたとき、それを遮って言われた言葉に銀時はうなだれていた頭を持ち上げる。

「私の名だ。性は趙、字は子龍。趙雲子龍とは、この私のことだ」

美少女――趙雲は、不敵な笑みを浮かべながらそう名乗った。

「……あ～、そう。俺は坂田銀時」

「……あ！私？えっと、劉備玄徳です」

「……関雲長」

「鈴々は、張飛なのだ！」

突然名乗られたことに、若干驚きながらも、銀時達も仕方無く自己紹介をする。

「坂田、銀時……、覚えておこう。私は、今ここの太守の公孫賛の元で客将をしている。機会があれば、また会おう、去らば！」

趙雲は、銀時の自己紹介を聞くと満足そうにうなずき、すぐに馬にまたがった。そして、最後に自分の身分を明かすと颯爽と銀時達の前から立ち去ろうとした。

しかし……

「とうっ」ヒヒーン！！

「　！？　」

「な～にを勝手に行こうとしてんだぁ～？人の話は最後まで聞きましょうって、先生に習っただろうが？」

趙雲が、馬を走らせ始めた直後、なんと銀時がその後ろにいきなり飛び乗ったのである。

「え！？嘘！？ご主人さま！？」

「ま、待って下さい！！」

「置いてくなあああぁぁぁ……」

桃香達が、銀時の行動にギョッとして声を上げるがもう遅い。馬は銀時達を連れ、見る見る内に遠ざかっていったのだ。

「……突然どうされたのかな？もしや私の魅力に発情されたかな？」

ここは、銀時と趙雲が出発した街より、しばらく走った位置にある荒野。
そこで、趙雲は後ろにしがみついている銀時にそんなことをいいながら、馬を走らせていた。
本当は街を出る前に降ろしたかったのだが、突然飛びつかれた馬は錯乱状態に陥っていまい、ここまで2人とも落馬せずに走らせることで精いっぱいだったのだ。

「バカですか？銀さんはもっとお淑やかで、笑顔の似合う女子が好みなの。会って、数分で正反対に位置するって、判断できちまいそうなお前が、なに言ってんの？」

そんな感じだから今銀時は、趙雲の腰にガッチリと手を回し、相当な至近距離で趙雲が囁く艶っぽい声を聞くことになるのだが、まるで動じる事無く、むしろ全力で否定その言葉をしていた。

「おや？釣れませんな。私としては、むしろ発情して頂いた方が、後々面白そうなのだが？」

趙雲は、そんな銀時の言葉にわざとらしく落ち込んでみせ、さらになんかとんでもないことをサラリと言った。

「なに言ってんの！？この子！？女の子がそんなこと言っちゃいけません！」

備考：銀さんは意外と紳士です（笑）

「意外と古風な考えなのだな、あのような見目麗しい少女達を囲っておきながら……」

趙雲は、銀時の意外な身持ちの固さを少し意外に思いながらも、今度は桃香達を引きあいに出してからかい始める。しかし、銀時はそれにも無反応で、むしろめんどくさそうに溜息をつきながら、否定する。

「三国時代でそんなこと言われるとは思わなかったわ……つーか、あいつらはそんなのじゃねぇよ」

「おや？そうなのですか？勿体ない」

趙雲は銀時の冷静な否定に面白くなさそうに肩をすくめる。

銀時は、そんな様子の趙雲にクギを刺しておこうと思ったのか、さらにこんなことを付け足した。

「あいつらは俺の……“コッチの世界”での部下みてぇなもんだ」

「ん……？“コチラの世界”？」

銀時はほとんど無意識に言ったことだったが、趙雲はその“世界”という単語にすぐに反応した。

「あ……あ～、これ言ってよかったのかぁ～？ま、いっか。隠してもしょうがねぇし……」

銀時が、趙雲の反応にようやく自分の言った単語を意識し、少し後悔するが、すぐにどうでもよくなったのか、気だるげに説明しだした。

「……なるほど、つまり貴殿が昨今巷を賑わせている天の御使いであると……」

「まぁ、賑わせてるかどうかは知ったこっちゃねぇがな」

顔に吹き付ける風を感じながら、銀時の説明を聞くこと数分。全て聞き終えると、趙雲は今の会話を吟味するように少し思考する。

（これは驚いたな……頃合いを見て、置いていこうと思っていたのだが、コレは……）

普段の趙雲ならば、こんな荒唐無稽な話簡単に信じたりはしなかっただろう。しかし、この男と初めて出会った時から感じている、自分でも掴み切れない独特の空気、
走り出そうとする馬に飛び乗るという身の軽さと、突拍子のなさ、そして何よりも……

「お～い、運転中は前見ろよ～」

黙り込んでしまった趙雲は銀時の、そんな気の抜けた声で意識を元に戻した。

「！　おっと、これは失礼した。なかなか、面白いことが聞けたので、つい思索にふけってしまいました」

「ぁあ？なんだコラ信じてねぇのか、おめぇ……あと、なんか敬語になってない？」

「ふふ、天の御使い様の前で無礼な態度など取れません」

「じゃあそのニヤケ面止めろ、ムカつくから」

「これは、生まれつきです」

「最高に腹立つ出産シーンだったろうな」

意識が戻ったら戻ったで、人をおちょくった態度しか取らない趙雲に、銀時も律儀に反応し続ける。

もし、ここが荒野を駆ける馬の上じゃなかったら、さながら夫婦漫才のようにも見える軽快さだ。

（くくく……本当に面白い男だ）

趙雲は、銀時との漫才をスラスラと続けながらも思う。

（……だが、確かに感じる）

最初に出会った時から分かっていた。この男に眠る……

（この男……強い）

修羅を。

「だいたいお前これからどこ行くつもりな訳？ていうか、俺も聞くの遅すぎだろ！」

「作者が書き忘れていたのだろう」

「作者ぁぁぁあ！！」

「ははは、元気なお方だ。ところで、さっきの答えだが……この馬は軍馬。行き先は1つしかありはしない」

「……あ？」

「ふふ……戦場（いくさば）だ」

ここは、黄巾党陣地。
そこでは、目をぎらつかせ、時折いやらしく笑い合いながら、盗賊達が戦いの準備を進めていた。

「くくく、よう守備はどうだ？」

「ぐへへへ、順調でさぁ、お頭」

「ぶほほ、腕がなるんだな」

……なんか、キャラ使いまわしてね？とか思った人。気のせいじゃありません。

と、その時だった

「敵襲！敵襲！」

今まで、剣を研いだり、酒を飲んでいた男達が一斉にざわめきだ

す。

「お？なんだ、意外と早いお出ましじゃねぇか」

「で？数はどんくらいだ？」

「ぶほほ、腕がなるんだな」

「は！それが……」

「ん？どうした？」

「それが……単騎なんです」

「「……は？」」

「ぶほほ、腕がなるんだな」

……デブは馬鹿だと思った人。その通りです。

一方その頃劉備達は……

「ど、どうしよう、愛紗ちゃん……ご主人さま、行っちゃたよ……」

「あ～も～！あの人は一体どれだけ自由人なんですか！」

「こうなったら、走っていくのだ！」

途方に暮れていました。（約１名ストレッチ開始）

「……とにかく、このままという訳にもいきません。走るかどうかはさておき、何とかして追いかけなければ……」

「う、うん！そうだよね！私体力に自信ある方じゃないけど、頑張るよ！」

「よっしゃ～～！準備完了なのだ～～！」

「……あまり、強くツッコめないのがもどかしいですね」

ということで、美少女３人によるサドンデス・マラソンが幕を開ける……

「こら！君たち！こんな所で何をやっているんだ！」

「全く、騒がしいと思って来てみれば、まだこんな所で油を売ってる市民がいたなんて……」

「「「……」」」

見上げるとそこには、馬に乗った兵隊らしき男が二人いた。

「よいしょぉぉぉおおおお！！！」ボガシッ！

「「ドブロッ！！」」」

「鈴々！？」

気が付くと、兵隊の２人は赤髪の少女に意識を刈り取られていた。

「鈴々ちゃん！ナイス！」グッ

「早く乗るのだ！」グッ

「いや、桃香様！？何普通に天界の言葉使ってるんですか！？あと、親指を立てるな！」

豆知識：劉備玄徳って意外としたたかだったらしいね

「よしっ！それじゃあ、出発なのだ！ハイヨ～！馬～！」ヒヒーーン！

「きゃ！もう、鈴々ちゃん早いよ～！」

「ものすごい手際いいですね！というか、この人達どうするんですか、桃香様！？あなた、一応仁徳の人でしょう！？」

「「ひゃっほーーい」」

「あれ？また無視？これ前にもありましたよね？ちょっと、待っ、ハイヨォォオオ！！」ヒヒーーン！！！

……作者的解釈で、愛紗って意外とさびしがり屋。

第七訓：駆け込み乗車は止めましょう（後書き）

いかがでしたでしょうか？無理やり感がいなめません。皆さん今回ばかりは
誹謗・中傷でもかまいません。ドシドシ感想ください。そして、悩める作者を導いて……

第八訓：ＢＧＭは『曇天』でお楽しみください（前書き）

ようやく戦闘描写まで、辿り着いたけど……短い。
すいませんっ！！どうしても、５千対２人の構図が思い浮かばなかったので、
ほとんど星の感想みたいなってしまってます。それでも、一応頑張ったので読んでくれれば幸いです……。

第八訓：ＢＧＭは『曇天』でお楽しみください

前回のあらすじ！

仁徳の劉玄徳が窃盗犯になりました（汗）

さて、再び場面は戻って黄巾党サイド。

「……本当に、単騎だな」

「……おとりですかね？」

「ぶほほ、腕がなるんｄ「お前ちょっと黙ってろ」

黄巾党の頭は、物見台から陣営に真っ直ぐに突っ込んでくる一頭の馬を遠目で確認しながら呟いた。

最初に、報告を聞いた時は何かの間違いかとも思ったが、実際にこの目で見てしまっては疑いようがない。

「……まぁ、いい。例えなんかの作戦だろうが、この数でかかりゃあ、どうってことねぇ。おい」

「へい！おう！おめぇら！あのバカ共ささっと畳んでやれぇぇぇぇ！！」

「「「オォォオオオオ！！！」」」

「……」

「……もう、しゃべっていいぞ」

さて、対してコチラは黄巾党の大軍に単騎で臨むバカ２人は……

……

「オイィィイイイ！！戻れっていってんだろうぉぉおお！！」

「おやおや、男のくせに肝の小さいお方だ」

「もうそれでいいから！！俺ミジンコ並の度胸でいいから！！だから、一回戻ろう！！銀さんからのお願いぃぃぃいいい！！！！！」

「全く……いきなり飛び乗って来られたのに、まがままなお方だ」

「あれは、なんかその場のノリだったから！つーか、お前が勝手に話切り上げて行こうとすんのが悪ぃんだろうぉぉおおお！！」

「一時のテンションに身を任せるものは身を滅ばすんですよ？」

「言うなぁぁあああ！！」

目前に迫る敵陣を目の前にして、銀時と趙雲は軽いスキンシップをしていました（爆）

「弓！撃てぇぇええ！！」

銀時達が乗った馬が近づいてくると、指揮官らしき男の声が響き渡った。

パシュパシュパシュパシュパシュパシュパシュパシュパシュ！！

それと同時に何千本もの弓矢が銀時達に襲いかかってきた。

「あああぁぁぁっぁぁあああああぁぁぁあああああ！！！！！」

銀時の情けない悲鳴が、荒野に響き渡る。

しかし……

「ふっ……甘いな」

趙雲は視界全体に広がる弓矢の雨を見ても、顔色一つ変えずに突っ込んでいく。

「この程度で、この常山の登り竜、趙子龍が打ち取れると思ったか！！賊共がぁぁあああ！！」

ギュルルルル！！

「「「なっ！！」」」

これは避け切れるものではないだろうとタカを括っていた黄巾党軍は、その光景に思わず声を上げた。なんと、馬の前方に騎乗していた女がその長刀を回転させることによって、迫りくる弓矢を全てはじき落したのだ。

「ふっ、たわいもない」

趙雲が、再び矛を斜に構えながら、息をつく。すると……

「おい」

背後で、先ほどまで喉から吐血せんばかりに叫び続けていた銀時が、急に低く、静かな声で趙雲に声をかけた。

「ん？どうかされたk……」

趙雲が振り返ると、そこには……

「……」

額に弓矢を指しながら、鬼をも殺せそうな顔をした銀時がいた。

備考：銀さんのオデコはブラックホール

「……とうっ」

趙雲は「にげる」を選択した

「待てコラ、アバズレェェェェエエエエエエエエ！！！！」

かくして、銀さんと趙雲のリアル鬼ごっこが……

もとい、銀時&趙雲　ＶＳ　黄巾賊×５千人　の戦いが始まったのであった。

その頃、荒野に２頭の馬が横に並びながら走っていた。

「鈴々ちゃん！まだ着かない？」

「もう少しだと思うのだ！馬はあんまり乗らないから、やりにくいのだ！」

「ご主人さま……！どうかご無事で……！」

その馬に乗るのは３人の美少女。１人で勝手に乗り込もうとしていた趙雲の馬に、無理やりひっついていってしまった銀時を追う桃香達だ。

「うう……慣れないからお尻が、痛くなってきたのだ」

「鈴々ちゃん頑張って！私も頑張る！」

「って、桃香様も痛いんですか！？もう！２人ともしっかり……

…あ！」

桃香と鈴々の股関節がそろそろ限界に近づいてきた頃。愛紗は前方に所々煙の上がる黄巾党の陣地を発見した。

「やはり……！ご主人さま！」

「あ！愛紗待つのだ！」

「ホント待って！お尻が裂けちゃう！」

愛紗は、煙を確認すると歯噛みし、馬の速度を上げた。鈴々と桃香もそれに必死に追いすがる。

「……なっ！こ、これは！」

「「　！！　」」

ようやく、黄巾党の陣地にたどり着いた3人の見たものは……

おびただしいまでの屍の山であった。

「う……」

視界に広がる見渡す限りの血の海、血の臭い、まだかろうじて息があるものの怨嗟の声。

これ以上ないほどの、死という現実を突き付けられ、桃香は吐き気を覚えた。

「桃香？大丈夫？」

馬から降りて、愛用の長刀を持ち変えながら、鈴々は心配そうに桃香を覗き込む。

「……だ、大丈夫だよ、鈴々ちゃん。私は、大丈夫」

「「……」」

しかし、そう言われても鈴々は未だに桃香の顔を見つめ続ける。銀時の姿を探して、目の前の死体の海を見回していた愛紗も、桃香の様子に気づき、鈴々と同じ視線を送った。桃香はそんな優しい２人に微笑みかけながら、また戦場に目を向けた。そこに居るはずのただ１人を思って。

（……ご主人さま）

その時だった……

「「「うあわぁぁあああ！！」」」

「「「　！　」」」

桃香達がいる位置のちょうど前方の丘の向こうから、黄巾党と思わしき男達が、退去して押し寄せてきたのである。

「なっ！？これは！？」

愛紗が驚いて武器を構える。しかし、やってくる黄巾党の様子を見て、今度は首を傾げることになる。

『あぁぁあああぁああ！！ば、化け物だぁぁあああ！！』

『助けてェェエエ！！』

『うわぁぁあああ！！』

男達は、皆一様に何かから逃げているようだったのだ。

「にゃ～！？な、何があったのだぁ～！？」

鈴々も、ものすごい勢いでこちらに突進してくる男達を見て、大慌てで武器を構える。

「くっ……今はそんなことを気にしている場合ではない！鈴々！！何としてでも、桃香様をお守りするぞ！」

「え！？う、う～～、分かったのだ！」

愛紗も、黄巾党がここまで恐れる存在というのが、気にならない訳では無かったが、今はそれどころではなかった。

「桃香様！しっかり、私の後ろに付いていてください！」

「う、うん！ごめんね、愛紗ちゃん……」

「何をおっしゃいます。私は、桃香様の剣、剣が戦うのは当たり前

のことです！」

力になれないことを悔やむ桃香に、愛紗はそう言って笑ってみせた。

そして、逃げてきた黄巾党が愛紗達の前に視界いっぱいに広がる。

その時、桃香は確かに聞いた。

『夜叉だ！白夜叉だぁぁぁぁぁ！！』

「はぁぁぁぁぁ！！」

「ギャッ……！」

桃香達が、銀時を探して黄巾党の陣地に到着していた頃。

趙雲はもう何人目になるか分からない敵を斬り殺している時だった。

「はぁ、はぁ、はぁ」

敵の波がおさまった一瞬を見極め、趙雲は荒い息を吐く。しかし、疲れは感じなかった。この為に、戦場を生き抜くために、今まで鍛え抜いてきた体だ。これくらいで、根を上げてもらっては困る。

（しかし……）

趙雲はふと視線を上げる。その先には……

「うぉぉおおお！！！」

「「「ぎゃぁぁあああ！！！」」」

夜叉がいた。

（あれには敵わないか……）

趙雲は、その夜叉を見ながら、ふと自嘲気味に笑った。

その夜叉は、銀色の髪を血風になびかせ、千を超える剣の林を自在に駆けぬける。

そのエモノは木の剣が一本。しかし、それを振るう様は、まさしく最強の鬼神であった。

「……白夜叉」

趙雲は、ふと呟く。男はそう呼ぶにふさわしい存在だった。

誰よりも速く戦場を駆け、誰よりも強く存在し続け、そして、この戦場では何よりも――――美しかった。

「全く……どうしようもない」

趙雲は笑った。幾百人の血を浴び、自らの葬った屍の中で、静かに、柔らかく、笑った。

「私も負けていられないではないか……！」

そして、少女もまた戦場を駆ける。

その時だった

「ぶほ、ほ……まだ……なんだな」

今まで、銀時の戦いに見惚れていた趙雲に、斬り倒したと思っていた屍が斬りかかってきたのだ。

「　！　」

しかし、趙雲は焦ることなくその剣を、身をひねって避けると、すぐに長刀を構える。

「全く、ゆっくりと観戦もさせてくれないとわな……！」

そして、剣を振りおろして固まってしまっている敵を斬り殺そうとした。その時だった……

ガッ

「　！　」

なんと、趙雲は今まで斬り殺した死体に、足を取られてバランスを崩してしまったのだ。

（っ！私としたことが……！）

そして、敵はそれを見逃さなかった。

「……腕が鳴るんだなぁぁぁぁぁ！！！」

殺意の塊と化した剣が趙雲を完全に捕らえた。

（く……そ）

趙雲は、静かに覚悟を決めた。しかし……

「だぁぁぁぁぁ！！」

バキャッ！！

その剣が、趙雲を捕えることは無かった。

気が付くと、目の前には白い雲柄の着流しに所々赤い斑点をつけた銀時が立っていた。

「……ったく」

銀時は、今叩きふせた男がもう起き上がってこないのを確認すると、ゆっくりと趙雲に振り返る。

「勝手にくたばるんじゃねーよ、アバズレ」

「……」

銀時は真っ直ぐに、趙雲を見つめながら、そうぶっきらぼうに言った。

「……ふふっ」

「あ？」

「ふふふ、はははは！」

そんな銀時を見て、趙雲はなぜかは分からないが、堪らなくおかしくなった。

「くはははは！！」

「え？なに？どうしたの？なに、おかしくなった？お～い、趙雲……」

「……星です」

「……あ？」

「私の真名です。背中を預けて戦う相手に、教えないのはおかしいでしょう？」

「……あ～、そう。なんか、コロコロ変わってめんどくせぇな、ソレ」

「ふふ、コロコロ変わるなど、あなた以外にいませんよ」

「　？　」

「……呼んで下さらないのですか？」

「あ？……なんで？」

「さぁ？」

「意味わかんね」

「くくく……」

「……なんなの、この子。気持悪いんだけど……」

銀時が突然笑い出した趙雲……もとい星に、若干引き気味になるが、星はそんなことはお構いなしに笑い続けた。

「……はぁ、ったくホント意味わかんねぇ女だな……おら、おめぇの笑い声のせいでまた鬱陶しいのが集まってきやがった」

「……そのようですな」

「……死ぬなよ、てめぇには後で死ぬほど、パフェおごってもらうから」

「お～、怖い」

２人は戦場で互いの背を合わせる。互いの命を預ける。

（……死ねるものか）

星は思う。

（貴方が、守る背中が破られることなどありはしない……！）

そして、戦鬼は舞う。

五大山の戦い

黄巾賊被害……死者　１２３８名　　行方不明者
５０名　重軽傷者（主に木刀による打撲）３３１２名

公孫賛軍……死者・行方不明者・負傷者　０名

――――――後にこの戦は『天の奇跡』と謳われ、大陸に語り継がれる『白夜叉伝説』の冒頭を飾ることとなる。

「よ～しっ！！そろそろ敵の陣に到着するな！煙も上がっているようだし……今いくぞ！趙雲！！」

「「「オオオオォォォォオオオォォォォオオオ！！！」」」

白馬将軍・公孫賛。無血勝利。

第八訓：ＢＧＭは『曇天』でお楽しみください（後書き）

いかがでしたでしょうか？本当は、最初戦闘を書くときはシリアス一辺倒で書こうと思っていたんですけど、気づけば半分がギャグに……ｏｒｓ

いつかシリアスな戦闘描写にチャレンジしてみたいと思います。

ちょっと、改訂しました。

第九訓：メモリーカードは頭ではなく心に挿入（前書き）

結構久々……かな？

第九訓：メモリーカードは頭ではなく心に挿入

ここは、公孫賛が治める街の城。先日の黄巾賊襲撃による混乱も解け、眼下に広がる街には、人々の活気が戻りつつあった。そんな平和な時を作り出した立役者である、我らが銀さんは、今公孫賛の執務室で……

「聞いているのですか？ご主人さま？」

ものっそい怖い顔した愛紗に、正座させられていた。

「い、いや～あの弁解って言うか、俺一応頑張ったんだけど？並みいる盗賊達を退治したんだけど……」

銀時は、５千人の盗賊達を前にしても感じることが無かったプレッシャーというものを、今リアルタイムで愛紗から、ビシバシ受けながらも一応弁解を言ってみる。しかし、愛紗はそんな銀時の言葉もあっさりと一蹴する。

「そういうことを、私は言ってるのではありません……私が言っているのは……」

そこまで言うと愛紗は、部屋の隅にポツンと立っている星に視線を向ける。星は、愛紗の射殺できそうな視線にも、やはり動じることなく面白そうに、銀時と愛紗の様子を眺め続けていた。

「なぜ……なぜ“戦場のど真ん中で、趙将軍が半裸になっていたか”ということです！！」クワッ！

「だぁかぁらぁぁぁぁぁぁ！！！」

愛紗が、銀時を詰り倒していた頃より、半日ほど時は戻った荒野。

銀時の木刀の一撃で意識を刈り取られた黄巾賊や、星は斬り殺した屍が無数に転がる戦場跡で、息を切らしながら立っていた。

「ハァ……ハァ……やっと終わったか……？」

銀時が、周りを警戒しながら言った。

「ハァ……ふぅ、そのようですな」

星がそれに応え、いつもの不敵な笑みで銀時に振り返った。

「おや？つらそうですな？この程度で音を上げるとは、これだけの働きをした武人が情けない」

「うるせぇ、銀さんは省エネなんだよ。こんなアクセル全開で、動くように出来てないんだよ」

「最近の電気自動車は、意外に馬力が強いと聞きますが？４００キロ出るそうですな」

「……疲れるから、そのネタ止めろ」

銀時と星は、土煙りで曇った景色の中で、軽口を叩きあう。戦いは終わったのだ。この２人の武神によって……

「……はぁ、ったく……けーるぞ。腹減った」

しばらく星と軽口を叩きあっていた銀時だったが、何を言っても人をおちょくったことしか言わない星にいい加減疲れたのか、１つ溜息をつくとそのまま歩き始めた。

「……そう言えば聞き忘れておりましたが、“ぽふぇ”とは何ですかな？」

「なんで、ベジータの身長とかは、知ってるのにソコ知らないの！？」

しかし、やっぱりおちょくられる銀さんであった。星はそんな銀時の反応に満面のニヤケ面を浮かべながら、後に続こうとした。

しかし……その時奇跡が起こった。

銀時の後に続こうとした星、その時……

「あ……」

戦いの疲労からだろうか、瞬間的に目眩に襲われる。

「！　あ、おい……」

前を歩いていた銀時も、一瞬遅れて気が付き慌てて振り返る。そして……

ガッ！ピッ、ハラッ……

「　！！！！　」

「……お？」

……状況を説明しよう。

趙雲が倒れそうになったちょうどその先に、黄巾賊が使っていた槍があった。その槍の穂先がちょうど、星の薄い着物の絶妙な位置に引っ掛かり、そのまま綺麗に着物を斬り裂く。当然、星の着物は星の体を離れることになり、そこには上半身ブラ1枚の、実に美し

く官能的な美を持つ美少女が……

「ありえねぇぇぇぇぇ！！！！」

銀時の魂の叫びが響き渡った……ていうか、こんなんばっかじゃない？

で、肝心の星はと言うと……

「……おやおや、気の早いお方ですな、銀時殿。野外がお好みですかな？」

上半身裸にいきなりなったというのに、全く動じず、むしろその豊満な胸や、形のいい括れを、強調しながら、銀時ににじり寄った。

「だぁぁぁぁぁ！！だからお前はそのノリ止めろ！！俺ぁ積極的な女は嫌いなんだよ！！」

しかし、銀時はそんな誘惑に一切惑わされる事無く、全力でツッコむ。……銀さんは軟弱なラブコメ主人公達とは違うのです！

「くく……ですが、目は離せられないようですな」

……しょうがないじゃない！！銀さんだって男なんだもの！！

「〜〜〜っ！チッ！オラ、これ羽織っとけ……！」

銀時は図星を突かれて一気に顔を赤くしたが、すぐに不機嫌な顔になると、着ていた着流しを脱ぎ、乱暴に星に突き出した。

「！　……ふふっ、紳士なのですな」

星が、いきなり突き出された着流しに一瞬驚いた表情を見せたが、すぐにそのぶっきらぼうな優しさに、からかいではない笑みを浮かべた。そして、星が着流しに手を伸ばしたその瞬間……

「！　ご主人さま～～！やっと見つけたよ～～！！」

なんとも、平和的な雰囲気がにじみ出した声が聞こえた。

「え……？」

銀時が星に着流しを突き出した状態のまま、そんなこの状況において一番聞こえたくなかった声に振り返った。そして、銀時は死体の山で埋もれた丘をコチラに向かって、元気一杯走ってくる桃香達を視界に捕らえた。

「はぁ……はぁ……もう！心配したんだからｎ……」

「ああ！桃香様！お一人で先行してはいけないとあれほｄ……」

「？　どうしたのだ？２人とｍ……」

そして、桃香達は“その光景”を目撃した。

「「「ご主人さま（銀ちゃん）のバカァァァアアアア！！！」

そこで、銀時の意識は途絶えたのであった。

「そんな奇跡と呼ぶのも、おこがましい奇跡起きるはずがありません！！」

銀時が説明し終わると、愛紗はにべも無くそう言った。

しかし、銀時としてもコレが１００％ノンフィクションなので、引き下がるわけにもいかない。

「俺だってそう思うは！でもしょうがねぇじゃん！！ここの作者バ

カだもん！！高校にもなってこんなアホみたいなラブコメネタにしか走れないようなバカだもん！！！」

……ホントすいません（泣）

「何を訳の分からないことを……！桃香様からも何か言ってください！！」

銀時の言い分（本当なのだが）が信じられなかった愛紗が、横でオロオロとしていた桃香に叫んだ。

「ふぇっ！？あ、私……？」

いきなり声をかけられた桃香は、驚いてビクリと肩を震わせた。

「え、え～～～っと……あの～、う～……」

声をかけられると思っていなかったのだろう。桃香はそのイヤでも目を引く胸の前で、ソワソワと手を組み直しながら唸り始めてしまった。

銀時はというと、愛紗の小言が逸れたことで、ここぞとばかりに桃香にＳＯＳしていた。

「お～い、桃香ちゃ～ん。お前からも、母ちゃんに言ってくれよ～」

「誰が母ちゃんですか！誰が！」

しかし、やはりそこは銀時。ギャグ混じりの弁解で愛紗にツッコまれた。

そんな銀時達を見てかどうかは、知ったこっちゃないがようやく桃

香も、どもりながら話しだした。

「あ、あのね！ご、ごごごごご主人さまって……」

「どもりすぎだろ……」

「……外で『する』のが……好きなのかな？」

・　・　・　・　・　・

「ってこの子何、聞いてんのぉぉぉぉおおおおおおおぉぉおおおぉぉぉぉぉぉおぉぉおぉおおおお！！！！！！？？？？」

・

正に全世界が凍りついたと言っても過言ではない衝撃の後、銀時の今年一番のシャウトが響き渡った。

「と、とととととととととととととととと桃香様まままままままままままっ！！！！そっそそそそそそそんなこと、どどっどどどどっどこで覚えられたんですかかっかかかかかかかかかかか！！！！？」

そんな銀時の叫びを背後に聞きながら、愛紗がほとんど瞬きほどの間に桃香に詰め寄り、どもりのギネスがあったら間違いなく世界が狙えるほどのどもり具合で言った。

「え！？違うの！？ていうか、ツバ！」

しかし、桃香は完全に天然だったようで、愛紗に肩を揺さぶられながら首をかしげている（ついでに、ツバもかかってる）

「くくく、劉備殿もなかなか侮れませんな♪ちなみに、銀時殿は痴漢プレイがお好みだぞ？」

そんな愛紗達の隣では、いつの間にか近づいてきていた星が、お得意の下ネタで銀時をからかっていた。

「あれ？なんで俺の趣味知ってんの？」

「あばばばばばばばばばばばばばば！！！！」

「愛紗ちゃぁぁぁあああああん！！！」

「ていうか、私達空気じゃね？」

「にゃ～～、アソコに入っていく勇気があるのなら、鈴々は止めないのだ」

「……私って、個性がないのが個性らしいな」

そんな地獄絵図な執務室の端。そこで、この部屋の主と赤髪の少女は実に懸命な判断を下していました。

「いや～、しかし……お前達の様子を見ていると、どうにもこの男が『天の御使い』で、しかも趙雲とたった2人で5千人の黄巾賊と戦った英傑とは信じづらくなるなぁ～」

愛紗が銀時達ボケ集団の下ネタ集中砲火に、キャパシティーオーバーして暴走しかけたのを、桃香が体をはって押しとどめ、なんとか執務室が落ち着いた頃。その部屋の主である公孫賛が、ようやく銀時達に近づきながら、至極もっともな感想を漏らした。

「あ……？」

背後からかけられた声に反応して、銀時が振り返る。それに、合わせるように桃香達も公孫賛の方を見た。そして、銀時が公孫賛を認識し、かけられた声が彼女からのものだと分かると……

「……誰？」

お約束☆

「オィィィイイイ！！予想はしてたけど！なんで、ついさっき自己紹介した私の名前を忘れるんだ！？」

公孫賛は当然のように忘れられたことに、心の中で号泣しながら、叫ぶようにツッコんだ。

「あ？自己紹介？……ハム子？」

「公孫賛だッ！！なんだその間違い方！？覚えてないだろ！！ネタだろ、チクショー！！」

補足：『公』→『ハ　ム』→『ハム子』

「ちょっと、ご主人さま！そんな失礼な態度とっちゃダメだよ！」

公孫賛が泣きそうになりながら……ていうか、ちょっと泣きながら、耳をほじり始めた銀時に叫びまくっていると、今まで2人のやりとりを見守っていた桃香が公孫賛を庇うように割り込んできた。それに続くように、愛紗や鈴々、ついでに星も銀時の前に立って、公孫賛を弁護し始めた。

「そうです、ご主人さま。この方は、こう見えてもこの街の『太守』、失礼があってはなりません」

「そうなのだ！ちょっと影が薄そうだけど、そこをツッコんではお終いなのだ！」

「気持ちはよく分かりますがな」

「み、みんな……！……ひどくね？」

この小説の恋姫達は総じて悪ノリ好き（笑）

「あ、あはは……ご、ごめんね？皆、悪気はないんだよ？」

最近すっかり定着しつつあるこのノリの犠牲者になってしまった公孫賛に、桃香は苦笑しながら振り返った。公孫賛はかなり打ちのめされた様子だったが、そこはイイ人公孫賛。弱弱しくはあるが気丈な態度で、桃香に笑いかけた。

「……いや、いいんだ。もう、ぶっちゃけ慣れっこだし、最近なんて家臣にまで、おちょくられる事まであるくらいだし……ホント全然気にしてないから……はは、グスッ……」

……なんかホントすいません。

「……あ～～～～～っと……、ほ、ほら！皆も謝って！！」

なにかトラウマにさわってしまったのか、すっかり塞ぎこんでしまった公孫賛（なんか時折『シングルベ～ル……シングルベ～ル……誰も～いな～い……』とか聞こえてくる）。

そんな公孫賛を見かねて、本格的にマズイと思った桃香は、後ろで罪悪感という冷汗で、溶けそうになっている銀時達に救援を求めた。銀時達も、渡りに舟な桃香の言葉に、すぐさま飛び付く。

「はっ……！え～っと、こ、公孫賛さ～ん！ごめんな～！俺達もホンキで言ってた訳じゃねぇんだ！お前にそんな重荷が、あるなんて知らなかっただけなんだ！！」

「申し訳ない！！私はどうかしていたんだ！！」

「にゃ～～、元気出すのだ！公孫賛のお姉ちゃ～～ん！！」

「う、うむ。私も少々悪ノリが過ぎた……」

趙雲までもが、一切面白いことも言わずに頭を下げた。……

……どんだけ、落ち込んでたんだ……。

「ほ、ほら！皆もこう言ってるし元気出して――」

桃香が両手を広げて、揃って頭を下げる銀時達を示して、公孫賛に呼びかけた。すると、公孫賛もようやく顔を上げ、自分に頭を下げる銀時達を見た。全員の目が、本気で自分に申し訳ないと言っている目だった。

「グスッ……うう……み、皆……すまない……そうだよな！過去のことを気にするよりも、未来に向って羽ばたいた方が、いいに決まってるよな！！」

そんな目を見て、今までいじけていた公孫賛は少々大げさに思えるが、なんとか立ち直ってくれたようだった。めでたし、めでたし……

「――パイパイちゃん！」

「死ねばいいんだろッ！！あはははははははははははは！！！！！！！！」

第九訓：メモリーカードは頭ではなく心に挿入（後書き）

いかがでしたでしょうか？感想お待ちしております。

第十訓：噂はだいたい七割増し（前書き）

今回は、短いです！すいません！しかも、書き方が……

第十訓：噂はだいたい七割増し

前回のあらすじ！

ジミ子に幸あれ……

銀時達が、公孫賛のＨＰをゴリゴリ削っている頃……。

銀時の奇跡としか言いようのない五大山での活躍は、瞬く間に大陸の諸侯へと広がっていた。

ある者は……

「姫ぇ～～！公孫賛のトコに『天の御使い』ってのが来たってホントですかねぇ～？」

「『天の御使い』？」

「え？姫、知らないんですか？最近、噂になってる乱世を治める天の使者って人のことですよ」

「はぁ～～？貧乏人さん達の間では、そんなバカみたいなお伽話がはやってますの～？全く、これだから門地の低い人は……」

「え～～？でも、噂によると、その『天の御使い』って奴が、公孫賛のトコに攻めてきた5千人の黄巾党を、天の奇跡～って奴で、バーッて……」

「はっ、それこそそのお話がバカバカしいお伽話であるという証拠ですわ！そんな5千人をバーッと……だなんて、文醜さんは本当にそんなことが起こると？」

「え？ん～～……確かに、信じられるかって言われたら……信じられないな～」

「現実的じゃないですよね……」

「そうでしょう？つまり、これは……」

「「これは……？」」

「影の薄い公孫賛さんが、私（わたくし）の華麗で美しい活躍を妬んで流した全くのデタラメですわッ！！」

「「……え～～」」

「オーホッホッホ！！全く、こんなセコイ、いえ、つまらない策をこうじてくるなんて……公孫賛さんは醜いお方ですわね～～、オーホッホッホ！！」

「「……はぁ～～」

特に気にせず……

また、ある者は……

「……最近、街が騒がしいようね」

「……どうやら、管輅という占い師が予言したという『天の御使い』が現れたようです」

「『天の御使い』？バカバカしい！そんな寝物語を信じるなど……！」

「姉者、そういうな……それだけ民も、この戦乱の世を憂いているということだ」

「全く、春蘭はホント考えなしのバカね」

「な、なんだと～～～ッ！！」

「お止めなさい、2人とも」

「「！　華林様！！申し訳ありません！！」」

「イイ子ね、2人とも……でも、春蘭の言ってることは間違い

では無いわ」

「！　か、華林様〜〜〜っ！！」

「民の心は確かに救いを求めている……しかし、それは天から落ちてくる余所者に求められるべきものではない」

「……では、その救いは誰が？」

「ふふっ……それを聞くの？」

「もちろん、華林様ですッ！！」

「……姉者」

「……ハァ」

「　？　」

「ふふっ……春蘭はかわいいわね」

己が胸にひそやかなる野望を燃やす……

（……でも、もしその『天の御使い』というのが本当にいると言うのなら……会ってみたいかもね♪）

そして、ほんの少し好奇心を持つ（笑）

また、ある者は……

「あ～～あ、ヒ～マ～だ～なぁ～～～～」

「何言ってるのよ、雪蓮。あなたさっき私が頼んだ書簡にもまだ目を通していないじゃない……」

「え～？だって、あれつまんないんだも～ん」

「仕事なんてものは得てして退屈なものよ……」

「……ハァ……あ～も～～！！ヒマヒマヒマヒマヒマヒマヒ～～マ～～！！！！」

「ちょっと、雪蓮姉様！！はしたない！！」

「……ん？あれ？蓮華、あなた姿が見えなかったけど、どこに行っていたの？」

「……ちょっと、このお転婆を懲らしめに」

「も～！思春！は～な～し～て～よ～！！」

「なりません。蓮華様のご命令ですので」

「ムキ～～～～～～ッ！！」

「……ハァ、全く揃いも揃って」

「ちょっと～～～～？冥林は何が言いたいのかしら～？」

「ご想像にお任せするわ」

「こいつ～～～っ……」

「自業自得でしょ、姉様？」

「ぶ～～……ところで、小蓮？あなた今度はどうしたって言うの？」

（（あ、逃げたな……））

「このっ！このっ！え……？え～っと、最近街の方で『天の御使い』っていうのが噂になってて～、それで面白ｓ……ゲフン、ゲフンじょ、情報収集に行ってたの～～！ねぇ？だから……」

「『天の御使い』？あ～、あの管輅とかいう子が予言したっていう？」

「無視すんな～～～ッ！！」

「小蓮……あなたまたそんなくだらないものに……」

「ムッキィィイイイ！！くだらなくないもん！！だって、その『天

の御使い』って5千人の……」

「5千人の黄巾党を天の奇跡にて、一撃のもとに葬り去ったという話でございましょう？そんな夢物語……」

「あら、そう？私は面白いと思ったけど」

「！　しぇ、雪蓮姉様！！」

「……姉様、またそんな……」

「確かに、夢みたいな話だけど～、私は信じるよ？その夢」

「……また、お得意の勘？」

「う～～ん……ていうか～、そんな人がいるんだったらさぁ～～、ぶっ壊してくれそうじゃん」

「「「「……」」」」

「この腐った世界を♪」

その力に夢を見る……

また……ある者は

「七乃～～、蜂蜜水は、まだか～～？」

「はいはい、美羽様♪少々お待ちください♪」

やっぱり、何も気にしていない。

第十訓：噂はだいたい七割増し（後書き）

いかがでしたでしょうか？はい、今回ほぼセリフオンリーです。

……

一応言い訳すると今回は、各地の恋姫はまだ謎の存在というスタンツで……

すいません……やってみたかっただけです。

あと、今回お話？が短くなってしまいましたが、実は作者スランp……ゲフンゲフン！……え～っと、少し方向性について迷っています。

具体的には……

1、日常編に突入するか否か。

2、早めに銀魂世界の悪役を登場させて、銀さんにヤル気を出してもらうか。

3、少しシリアス風味で、桃香達を活躍させて、銀さんにヤル気を出してもらうか。

……の3ルートで迷っています。

そこで……ホントできればでいいんですけど……読者の皆さんにどれがいいか選んでいただきたいんです！いや、ホント身勝手なヘタレだとも自分でも自覚してるんですけど……とりあえず、今パソコンの前で土下座してるんで、考えてみてはいただ

けないでしょうか……？お願いしますッ！

あ、もし何かほかにやってほしい展開があれば、それも送ってきてください！！

最大限活用させていただくのでッ！！

番外編：それでも世界は回っていく（前書き）

久々の投稿です。すいません……

投票の結果を報告します。

投票の結果、2番の展開で行くことにしました。ということで、今回は江戸編です。お楽しみください。

番外編：それでも世界は回っていく

銀時が異世界へ遭難してから、二週間が経過しようとしていた……。

ここは、江戸の街、歌舞伎町。金と欲望、そして自由が共存する歓楽街である。
その街の一角、木造建築二階建ての一軒家。下に『スナックお登勢』、上に『万事屋銀ちゃん』とデカデカとした看板が掲げられたその家の屋根の上に一人の少女がいた。

オレンジ色の髪、それを団子状にまとめ上げる髪飾り、透き通るような白い肌、そしてチャイナ服。
この『万事屋銀ちゃん』の従業員、神楽であった。神楽はいつものように、好物である酢昆布をしゃぶりながら、日に日に強くなる日差しを避けるための番傘をさしている。

特になにかをしているわけでもない。その目はどこを見るとでもなくボーっと遠くを見つめているだけである。そうしていれば、その先になにか見えるのでは……そんな期待もあるかもしれない。

「あっ！いたいた、神楽ちゃんやっぱりココに来てたんだね」

そんな時だった。ふいに屋根の下から、神楽に向かって声がかけられた。
神楽が声のした方向を見ると、見知ったメガネの少年が階段を上ってくるところであった。

「そんなところで何やってるの？」

メガネの少年――新八は神楽の足元まで来ると、神楽を見上げながら尋ねた。

神楽はそんな新八をしばらく睨みつけると

「……なんか用アルか、駄メガネ」

「オイィィイイイ！！だから、オメーいつも何でメガネをほふってくるんだぁぁああ！！そんなにメガネが駄目なのか！メガネをかけてる人は悪ですかぁぁああ！！」

「うっせ～な～、メガネじゃなくてお前が駄目なんだよ新八（ど○てい）」

「僕が何をしたっていうんだよぉぉおお！！（泣）」

お互い顔を合わせた瞬間に始まるいつものボケ&ツッコミ、神楽はいつも通り毒舌で、新八はいつも通り駄目なメガネ略して、駄メガネだった「作者、てめぇ出てこいや！！」

しかし……

「ハァ……なんかコレ前にもやったアル」

「だから、そう言ってんじゃん……」

彼女達は深い溜息をついた。

「……で、神楽ちゃんはココで何やってたの？」

溜息をつき、しばらく沈黙が続いたがふと新八が口を開いた。

「……」

新しく酢昆布の箱を開けようとしていた神楽の手がそこで止まる。

「また……また、銀さんを待ってるの？」

問いかけても押し黙ったままの神楽。仕方なく、新八は階段の手すりに肘を置きながら言葉を続けた。

「……神楽ちゃんの気持ちも分かるよ、でももう頼れるあては全部あたってみたし、近藤さん……真撰組にも捜してくれるように頼んだ。もう……もう僕らにできることは……」

「うっさいアル」

新八が弱音を吐いていると、それを遮るように神楽がピシャリと言った。

「銀ちゃんは……銀ちゃんは約束してくれたアル。もう背負うことから逃げないって、もう勝手にワタシ達の前からいなくならないって……約束してくれたアル」

「……」

「ワタシ、銀ちゃんを信じるネ。銀ちゃん、約束は破らないから……バカでチャランポランでマダオのプー太郎だけど……それでも銀ちゃんは……」

「……」

「サムライネ！」

「……！」

そう言った神楽の顔は、いつも通りの曇りのない晴れた空のような笑顔だった。

「……神楽ちゃん」

「それに、バカとなんとかは高いとこ好きっていうアル。銀ちゃんバカだから……」

「神楽ちゃん」

今まで、いいこと言っていたのに途端に悪口を言い出す神楽。このあたりが神楽が神楽たる所以だろう。しかし、新八はそんな神楽にツッコむこともなく、その悪口を遮った。神楽が怪訝そうな顔をする。

「降りてきて、神楽ちゃん」
「！　……嫌アル」
「そんなとこじゃ、暑いでしょ……中に入ろ」
「　！　」
「あのチャランポランが帰ってきたとき、ココが汚かったらいろいろうるさいから、掃除しときたいんだよ」
新八はそういうと、手際よく万事屋のカギを開けた。
「だから、神楽ちゃんも手伝って」
そう言って、神楽を見上げた新八の顔はやはり笑顔だった。
「……調子に乗んなよ、雑用」
「お前らが一向にしようとしねぇからだろうがぁぁあああ！！」
新八の先ほどよりもキレのあるツッコミが歌舞伎町の空に響いた。
すると……
「あ、あの～……」
「「ん……？」」

「依頼をお願いしたいのですが……」

引きつった表情のオッサンがそこにいた。

番外編：それでも世界は回っていく（後書き）

いかがでしたでしょうか？今回は結構短いです。これからは、これくらいの長さで投稿していきたいと思います。すいません……

あと、この前感想を見ていたら、銀八先生をやってほしいという感想っていうか要求があったんですけど……やった方がいいですかね？

あ、あと最近始めたバカテス×銀魂も見てみてください。

第十一訓：心の病はなかなか気づけない（前書き）

久し振りの投稿です！短いですけどお楽しみください！

第十一訓：心の病はなかなか気づけない

公孫賛の街が、黄巾賊の襲撃に遭いそれを銀時達が撃退してから、もう早二週間……。

あの後、公孫賛は銀時達のイジリ倒しのダメージからなんとか回復すると、この街に留まってくれないかと頼んできた（あれだけのことを言われたのに、本当にいい人だ……）。

この世界にやって来たばかりの銀時はもちろん、桃香達も特にほかに頼るあてもないということなので、銀時達はその申し出を快く受けることにした。そして、銀時が桃香達や街の人達に支えられながら（時に殺されそうになりながら）この世界に順応し始めていた、そんな頃。その騒動は起こった。

「ご主人さま～！！ご主人さま、どこにおられるのですか～！？」

ここは、今銀時達が滞在している公孫賛の城。愛紗は仕事中にいつのまにかいなくなってしまっていた銀時を探していた。

「はぁ……全く。あの人は、せっかく公孫賛殿が迎えてくれたというのに毎日、毎日……」

もうすでに半刻ほどは探し回っている。愛紗はこの二週間の間に実感しつつある銀時の人間性に、腹の底から溜息をついた。

まず、話を聞かない。どんなに一生懸命話していても、それが面倒なことだと分かるや否やはぐらかそうとする。そして、どうにか

仕事をやらせたとしても、どこかでふざけた態度をとる。

それだけなら、怒って『お仕置き』でもなんでもすればいいのだが、それに加えて減らず口が異様にうまいのだ。もう何度あの憎たらしいヘラヘラ顔を見たことか……。

「この前は、兵の訓練中に兵に団子を買いに行かせていたし、その前はなぜか桃香様と『うの』とやらをやっていたし、その前は、鈴々と一日中昼寝してたし、その前は趙雲殿と昼間から酒浸りだったし、その前は、団子食べてたし、その前は、桃香様と……」

無意識のうちに日頃の銀時の体たらくをブツブツと呟く愛紗。そして、ふと気づく。

「……っていうか、皆マジメに働けよッ！！！」

当然のツッコミだった。すると……

「おや？これは、これは、関羽殿ではないか？どうされた？」

今の愛紗と正反対に位置するような気楽そうな声が愛紗にかけられた。

「！　趙雲殿！いや何、我らの主について少しな……」

愛紗が振り返ると、そこにいたのはやはり不敵な笑みを湛えた星だった。

愛紗は、先ほど叫びが聞かれたと思い少し慌てた態度をとるが、星はそんなことは微塵も気にしていない様子でむしろ面白そうに愛紗

を見ながら言った。

「主……銀時殿か？ふふっ、もしや関羽殿は銀時殿にかまってもらえず寂しい思いをしているとか？」

いつも通り愛紗をからかうようなことを言う星。いつもならば「べ、別に私はご主人さまのことは……！／／／」みたいなツンデレ反応を起こしそうな挑発だが……

「いや、全然」

「……あ、そう」

……愛紗さんは本気で疲れています。

「……で、では、関羽殿は銀時殿に何用で？」

あまりに空気を読まないあっさりとした返しに、一瞬立場が無くなった星だったが、すぐに気を取り直して愛紗に再び尋ねた。

「ああ、実はあのチャランｐ……ご主人さまがまた仕事を放ってどこかに行ってしまわれたので、いい加減首をきｒ……さがしているのだが」

「関羽殿、本当に大丈夫か？」

愛紗さんはマジで疲れています。

「趙雲殿、心配して下さるのか？かたじけない。しかし、大丈夫です。悪いのはあの天ｐ……白髪なのですから」

（関羽殿、あなたは大丈夫じゃない）

星は愛紗がもう引き返せない所まで来ていることを悟った。そして、これ以上関わりたくないと思った。

「そ、そうか……あ、銀時殿であったな。それなら先ほど、厨房でお見かけしたぞ」

「厨房？」

「ああ。では私はこれで失礼する」

「あ、趙雲殿！……何をあんなに急いでいたのだ？」

愛紗それはあなたから逃げているんですよ。

「む、こんなことをしている場合ではない。あ～も～、あの不良ご主人さまは～！！」

しかし、そんなことは知る由もない愛紗は、星がいなくなると初めから寄っていた眉間のシワを深くしながら厨房へととんで行った。

一方、その頃……

「はわわ～、やっと着いたね～雛理ちゃん」

「う、うん朱里ちゃん……はふ～」

「あはは、疲れちゃったね」

「あわわ、ゴ、ゴメンネ、つい……」

「ふふ、じゃあちょっと休憩しようか」

「……う、うん」

……とある二人のロリ少女♪

第十一訓：心の病はなかなか気づけない（後書き）

いかがでしたでしょうか？今回は、物語で言うとまだ『起』の序盤みたいなもんですね。すいません……

第十二訓：正面からだけでは人は分からない（前書き）

どうも！月跨いで久し振りの投稿です！！今回はキャラ崩壊がひどいです！！いつもだろ、というツッコミも打ち消すくらいひどいです！！それでも、大丈夫という勇者の方はどうぞお楽しみください！！

第十二訓：正面からだけでは人は分からない

前回のあらすじ！

厨房へと走る愛紗ッ！！そこで目にしたモノとは！？（糖）

さて、ココは公孫賛の城にある厨房。普段は侍女達が皿洗いや調理、井戸端会議などでかしましくせわしなく動き回っているこの場所。

しかし、現在の時刻はちょうどお昼過ぎ。いくらこの時代の料理は手間がかかると言っても、まだ夕食の準備には少し早い。厨房はいつもの忙しそうな雰囲気はなりを潜め、どこか閑散とした雰囲気で漫然と夕食までの時を待ち儲けていた。

「フンフンフフ～ン♪ひえひえプルプル～♪」

……ただ一角を除いて。

「お～、コレ我ながらウマくいったんでね～のコレ～。やっぱ俺天才だな～」

そんな誰にとも言えない、つまるところ自画自賛を呟きながらこの時代には貴重な氷箱（作者命名）から、見事に冷え固まった黄色い物体――まぁ、つまりプリン（自作）を取り出しながら銀髪の男――銀時はニヤリと笑った。

「うほほ～、どうすっかなコレ～♪このままカップのままいっちゃおっかな～？それとも皿に移してこの極上のプルプル感を～……♪」

もう二十代も半ば、普段は死んだ魚のような目でヤル気のカケラもない男が、三角巾にフリルエプロンでニヤニヤニヤニヤとプリン（自作）を眺めるこの画。……ぶっちゃけ相当気味が悪い。……てか、このオッサンは仕事ほったらかしてプリンって、ちょ、オマｗｗｗ

「う～ん……、おし！やっぱプリンはぷるんってなってこそプリンだよな！食は見た目からってサ〇ジくんも言ってたし～～♪」

そんなマダオ（マジで、ダークサイドに堕ちろこの、オッサン）銀時。プリン（自作）片手にしばらく唸ると、ようやく自分なりになんか納得したのか普段からは想像も出来ないような軽やかな足取りで厨房脇の食器棚に駆ける。ティーカップの受け皿に使うような底の浅い皿を机にセッティングするとようやく席についてツルリとプリン（自作）をセットした皿の上に落とした。プルプルと皿の上でふるえるプリン（自作）……これは、確かにちょっとおいしそうだ。

「じゃ～、いただきま～す、と♪」

スプーンが用意できなかったので、少し使い勝手は悪いがレンゲを装備した銀時。しかし、それでも器用にそのパティシエ並のプリン（自作）をすくうとゆっくりと口の中へ――――

「ごぉぉぉぉぉぉ主人様ぁぁぁぁぁぁ！！！！！」　　ドカァァアアン！

「うぉぉおおお！！？」

まさに爆音だった。銀時がプリン（糖分王を自称し尚且つ極端にめんどくさがりな銀時がわざわざ材料を注文して2時間をかけて制作した渾身の逸品）を、口に運ぼうとした瞬間、それはもう扉が爆発したんじゃないかと見まがうほどの勢いで開かれたのだ。危うく、プリン（糖分王を自称～以下略～）を落としそうになった銀時であったが、執念だろうか？レンゲの上で盛大にプルプルしまくる一杯ですら落とすことはなかった。

「ちょ、え！？何！？何！？隕石でも落下してきた！？アルマゲドン！？つうか、ちょっと漏らしたんだけどぉぉおお！！？」

……そのかわりなんか人の尊厳的なものはポローンと落としてきたみたいだが……

「ウルセェーーーー！！！」

「ドバァァァア！！」

そして、殴りとばされる銀時（マダオ）。もう銀時としては訳が分からないところだが、読者の皆さんはもうお分かりだろう。そうこの銀時を殴り飛ばしたのは、我らが黒髪美少女――――

「てめぇの股間のことなんざ知ったこったねぇんだよ！！この不良救世主が！！」

関雲長……さん……です……たぶん。

「って、誰ェェェエエ！！？何この人！？なんか、羅王みたいな人

がミニスカ着てるんですけどぉぉおお！！？」

……ストレスはなめると本当に病気になるので、早めに治療しましょう。

「関羽だよ！！関羽雲長！！んなことも分んなくなったのか！？ああん！？アレか、老化か！？老化なのか、白髪バカがぁぁああ！！！」

「ええぇぇぇぇぇぇぇ！！？ウソ！？え！？いいの、コレ！！？いろいろアウトにならないのコレェェエエ！！？」

「何をゴチャゴチャいっとるんじゃワレボケカスゥゥウウ！！仕事もせんとプラプラ、プラプラしおってからにホンマ、殺すぞタコがぁぁああ！！」

「お、落ち着け！！な！一旦落ち着こう関羽（？）さん！なんかもういろいろダメだから！！もう全てにおいてダメだから！！一旦落ち着こう！！銀さんからのお願い！！」

「ああん？お前コラこの後に及んでアタシにダメだしか？てめぇはアタシにダメだししてんのかッ！！？」

「いえいえいえ！そんな訳ないじゃないですか！！もう関羽さん冗談キツイっすよ！！！」

……あれ？なんかこんなん原作でもみたな……

…アレ？

「だいたいお前はアレだろ！？天の御使い様なんだろ！！？お前そ

れが一日中あっちでプラプラ、そっちでシコシコ、あそこでパンパンしくさってからによぉ、ペッ！」

「ねぇ？この子酔ってるの！！？もうダメだよこの子完全に悪ノリしたオッサンだよ！発想が酔っぱらったオッサンそのものだよ！！」

「……もうお前はホントによ～、あちこちで桃香様達たぶらかしてなにやってんだよ！！ホントによ～～……」

「いやいや、たぶらかすだなんて……」

「……なんなんだよチキショー……（なんで、私は誘って下さらないんですか……）」

「へ……？」

……あれ？

「っ！！と、とにかく！！ご主人さま！！あなたは天の御使いとしての心構えが無さすぎます！！もっとちゃんとしてください！！」

「いや……あれ？あれあれ？今なんか聞こえたような……」

「～～～っ！！は、話を逸らすおつもりですか！！」

「あれ？な～に顔真っ赤にしちゃってんの～？あれか？お前もしかして――」

「～～～～～～～っ！！」

「寂しかったとか？プッ」

プツン

……あ～あ

「ぬわぁぁぁぁぁぁ！！！！！！／／／／／／／／」

「ぎゃぁぁぁぁ！！？」

……こうして銀時の長い一日は始まったのであった。

その頃……

「……？」

「？　どうしたの？雛理ちゃん」

「……今誰かの叫び声が聞こえたような」

「え！？ホント！？」

「あ、でも、たぶん聞き間違い……かも」

「でも、雛理ちゃん聞こえたんでしょ？」

「……うん、たぶん」

「う～ん……ちょっと嫌な予感」

次回！遂に邂逅ッ！！？

第十二訓：正面からだけでは人は分からない（後書き）

いかがでしたでしょうか？もうあれですね殺されても文句言えないよ作者……ｏｒｚ　それでも感想お待ちしております！！

あと、前々回での番外編で、サディストさんから感想でツッコミがあったのですが、すいません返信ではなくコチラで説明させていただきます（オイ

え～、あの文字はですね「待つ」ではなく「侍」。つまりジャパニ～ズソルジャ～のことを言っていたんですよね（なんだこのノリ……）

紛らわしい書き方してすみません。今はカタカナにして読みやすくしています。

ご指摘ありがとうございました。

第十三訓：武将だって悩んでる（前書き）

こん〇〇は！！今回はそれなりに早めの投稿です！！
前回、ストレスがとうとう臨界点を超えた愛紗さん。どうなる！？
銀さん！！

今回はいつもと手法を変えてお送りしています。後書きで質問したいこともありますので、ぜひ最後まで覗いていってください。

第十三訓：武将だって悩んでる

前回のあらすじ！

坂田さんのリアル鬼ごっこ、始まります。

世の中ってのは、言っちまえばそれぞれの『役割』の集合体だ。サラリーマンにはサラリーマンの、ジャンプ主人公にはジャンプ主人公の、税金泥棒には税金泥棒の、チャランポランにはチャランポランなりの『役割』ってもんの中で人ってのは生きてるもんだ。

世の中にはそれを型にハマってるだの、俺はそんなもんには縛られねぇ！みたいな中二臭いことを言って、その枠から外れようともがいてるような奴もいるが、俺から言わせればソイツらも十分『役割』の中で生きてんだ。

ソイツらもテメーの、テメーで決めた『役割（ルール）』の中で生きてんだ。仕事がソイツの『役割』なんじゃねぇ、肩書きがソイツの『役割』なんじゃねぇ、ましてや他人にこじつけられた生き方なんざクソくらえだ。テメーの『役割』はテメーで決めろ。それが、テメーの居場所ってもんになってくんだからよ……。

「……という訳で……俺は一言も天の御使いです！なんて名乗った覚えなんざねぇんだってばぁぁぁぁぁ！！！」

「知るかぁぁぁぁ！！！」

やぁどうも。こんな小説にシコシコ通ってやがるヒマな読者の皆さんこん○○は、皆のヒーロー坂田銀時で～す。え～、皆さんたぶん色々ツッコミたいことがあると思いますが、その辺はこの一言で片づけられると思いますので、よ～く聞いておいてください。

『はい、コレ作者の気まぐれですッ！！』

はい、そうです。今回のこの俺がナレーションやっちゃてるＹＯ！的な状況は全て作者の陰謀です。だから、皆さんすべからく作者を袋叩きにしましょう。これ宿題です。

……………………え～っと、ここまで罵ればあのバカのことだからそろそろツッコミを入れてくるかと思ったんですが、全くありませんね。

アレです、完全にボイコットです。職務放棄です。…………………正直銀さんもダルイので、もう帰りたいのですが、帰って月9の再放送みたいんですが、生憎もうこれでスタートしちゃってる感じらしいんで仕方なく今回は俺がナレーション的なことをやりますーパーの自働ドアに挟まって死ね作者。

え～、では冒頭のやり取りからボチボチ再開したいと思います。テメーらちゃんと付いいてこいよー。

中華系列糖分に飽きた俺は新たなるステージを開拓すべく厨房で一人せっせとプリン作りに勤しんでいた。と、そこへ羅王登場。

羅王は俺の必死の弁解にもまるで耳を傾けず、問答無用で俺を殴りとばし、俺はなんやかんやで死に物狂いで街へと脱出した。

これは、街まで出ればさすがのあの羅王も理性を取り戻すだろうという俺の非常に常識的な見解だったのだが……………

「はぁぁあぁあああぁあぁあああ！！」

ズバン！！

「ぎゃぁぁああ！！」

どうやら、羅王は大事なものをどこかに落としてきてしまったようだった。

「ていうか、愛紗ちゃぁぁああん！！？ここどこかわかってるぅぅぅう！？ここ街中だから！！ソレ純然たる凶器だからぁぁああ！！」

「大丈夫です。修理費はご主人さまの給料から差し引いておきますから」

「なんでそこだけ、とんでもクールぅぅウウウウ！！？」

残念ながら、羅王は魔王にジョブチェンジしたらしい。もうアレは悪魔の化身だ、もうそういうことでファイナルアンサー。

『きゃぁぁああ！？』

『な、なんじゃぁぁああ！？』

『うわ！？突風！？』

俺とあの魔王が駆け抜けた後には、善良な市民さん達のとばっちりによる悲鳴が響く。

……一応ケガ人はいないみたいだが……、てかあ

れだけ殺意満々で突撃してきてるのに、どんだけ器用に避けてるんだアイツは。

まぁ、でもこのままじゃあ１００％取り返しのつかないことになるよなぁ～、主に俺のこずかいが……。

「……それだけは何としてでも――」

と俺が改めて、この地獄の鬼ごっこから抜け出す方法を模索し始めた、その時だった。

「隙ありぃぃぃぃ！！」

俺の顔のもう５センチ未満ぐらい横に何かが横切った。

ビィィイイン！！

それは、愛紗愛用のあの無駄に凶悪なデカイ薙刀（？）だった。

「ってあっぶねぇぇぇえぇ！！！」

「ちぃ！外した……！」

あ、あのアマ！３０メートルは離れてたよなぁ！？コレ、ちょっと壁にぶっ刺っさてんですけどぉぉおお！！？

「お、お前コノヤロォォオオ！！マジで死ぬぞ！！コレシャレにならないぞぉぉおお！！」

たまらず、俺は後方から突撃してきたもはや悪鬼羅刹となり果てた女に吠えた。いくらなんでもコレはさすがの銀さんでも死にかねませんからね、ホントッ！！

すると、奴は投擲の体勢から戻りながらも、心底心外だという表情をしながら言った。

「……心外ですね、私は仮にも銀時様を主と認めた身です。冗談や酔狂で主を手にかけるほど、私も落ちぶれてはおりません！」

「で、ですよねー、仮にもアナタ真面目キャラですもんねぇ～。そんなギャグパートだからって、いちいち流血沙汰なんか――――」

「貴方を殺して、私も死にますッ！！」

「何がお前をそこまで追い詰めたんだ！！？あ！俺か！？」

ダメだ。もはやアイツはどうしようもない。完全にブチギレてる。脳のシナプスが超反応を起しちまってる。

ていうか、そうこうしてる間にもう奴が、D○Oが突撃してきてるしぃぃぃ！！

「ぬぉぉおお！！壁走り走法！！」

俺は愛紗がブン投げた薙刀（名前しらね）を足場に屋根の上へ跳び上がった！おお、意外と出来るもんだな！！しかし……

「逃がすかぁぁああ！！」

奴はそれを一度の跳躍だけで跳び上がってきた。

「ええ！？ココ４階くらいあるんですけどぉぉおお！？」

「シネェェエエ、ゴシュジンサマァァアアア！！」

「そして、この後に及んでご主人さまってぇぇええ！！？」

俺は奴が跳び上がった体勢のまま横に振りぬいた殺戮兵器を間一髪で避けながら、心の中で静かに思った。

……健康診断ってバカにできない。

一方、銀時と愛紗が街中でブルー〇・ウィ〇スもビックリのアクションを繰り広げている頃。

「う～ん……、う～ん……、ね、ねぇパイp――じゃなくて、白蓮ちゃん」

「おい、今パイパイって言おうとしただろ、いい加減殴るぞ私も。

……で？なんだ？桃香。また、分からないところがあったのか？」

ここは、公孫賛の城の執務室。そこでは、２人の少女――赤みがかったポニーテール以外は特にコレと言って特徴のない少女「作者にまで言われたッ！？」白蓮と、ボンヤリとした印象を受ける桃色の髪の少女、桃香が２人がかりで机に山と積まれた書簡、竹簡の整理をしていた。

……まぁ、実際に白蓮が桃香の質問にいちいち律儀に答えてやりながらやっているので、ペースとしてはだいぶ遅いのだが……。

「うう、ゴメンネ白蓮ちゃん……、せっかく置いておいてもらえることになったのに私全然役にたってなくて……」

桃香が白蓮に自分のやっていた書簡をチェックされながら、シュンとした様子で白蓮に謝った。しかし、白蓮は……

「ん？ああ、そんなこと気にするな。桃香は政務の仕事初めてなんだから、分からないことや、出来ないことがあったって当然だろ？」

その言った表情は本当に気にしていないようだった。……ホントこういう人見ると、心が温まるよね。

「ぱ、白蓮ちゃん……ッ！」

桃香はそんないい人代表白蓮のいい人っぷりに感極まってしまう。桃香はそのまま白蓮の、まぁ平均よりはありそうな谷間へとダイブ……

「まぁ、でも、そう思うなら早いとこ一人立ちして欲しい気持ちはあるかな」

「あぅ……」

しようとしたけど、あっさり片手で押し戻されてしまい、ついでにこの場にはいないあのマダオ主人のことまで注意されてしまった。

「……そう言えば、関羽殿はどうしたのだ？」

机の上の書簡と竹簡が順調に数を減らしていく中、思いだしたように白蓮が話しだした。

「愛紗ちゃん？」

ようやく少しは慣れてきたのか、さっきのカタツムリスピードからカメくらいのスピードまで仕事の速さが上がってきた桃香が白蓮の言葉に反応する。

「いや、確かさっきお前達のあのぐーたら主を探しに行っただろ？」

白蓮がちょいちょいと外の方を指さしながら言う。

「ぐ、ぐーたらって……まぁ、全然否定できないけど。でも、そう言えばそうだね」

白蓮が自分の目の前で堂々と自分の主人のことを侮辱してきて、若干苦笑いを浮かべた桃香だったが、考えてみれば否定できる要素も皆無であったので、すぐに切り捨てた。（ってオイ
すると、桃香が首を傾げる横で白蓮が急に眉間にシワを寄せて、なぜか小声で言った。

「……もしかして、バレテしまったのか？」

「……ふぇ！？」

途端に顔を青くする桃香。

「い、いや、だ、大丈夫じゃないかな？ご主人さま、ああ見えて口だけはウマいし……」

「いや……、でも万が一ということもあるだろう？」

「うう……」

どうやら、何か愛紗にはヒミツのことがあるようだ。一体なんなんだろうか……？

と、その時だった。

バタンッ！

「こ、公孫賛様！緊急！緊急！！」

「「　！？　」」

突然、扉を蹴破らんばかりに飛び込んできた一人の兵士に、白蓮と桃香が飛び上がらんばかりに驚く。

「な、ななな何事だッ！？無礼であるぞ！？」

内緒話をしていたこともあって、音には敏感になっていた白蓮。早鐘のようにバクバクとする心臓をおさえつけながら、とりあえず叱ってみる。

「緊急事態にございますッ！！」

「あれ？無視？」

しかし、兵士もよほど焦っていたのだろう（たぶん、絶対）。白蓮の言葉が耳に入っていなかったようで、そのまま執務室にズカズカ入ってくると、白蓮の前でビシッと姿勢を正した。

「い、一体どうしたんですか？」

白蓮以上にビックリして、声も出せなかった桃香がようやく復活して、噛みながらではあるが緊張しながら、兵士に尋ねた。

「はっ！それが……」

桃香に尋ねられた兵士が、そちらに体を向けながら報告し始める。
（ちなみに、白蓮はすでに空気化「おい！？」）
「天の御使い様と閑雲長様が市街で暴れまわっているとの報告が！！」
「……え？」
「はぁぁああ！！」
「背面エビ反り避け！！」
後ろの顔面般若と逃走劇を続けてもうどんだけになっただろうか？場所を屋根の上に移したから、少なくとも俺の給料の心配は減ったと思うが……
しかし、障害物が少なくなった分、奴は積極的に攻撃を仕掛けてくるようになり、今の攻撃も正直いってヤバかった。これ、一着しかねぇんだぞコノヤロー。
「くそッ、普段あれだけ怠惰な生活を送られているというのに、なんて身のこなしですか！」

「悪りーな、俺には主人公補正っつー便利な機能がデフォルトで装備されてんだよ」

渾身の一撃を避けられたことで、一瞬隙の出来た奴からなんとか距離をとりながら俺はとりあえず憎まれ口を叩いておく。

……しかし、実は内心とてもそんな余裕はなかったりもする。正直、銀さん騙し騙しだからね？悪徳商法だからね？不良が体力ねぇのと同じ原理だよチクショー！

ハッキリ言ってこれ以上続けられたら、間違いなく仕留められる……。マジどうしよう。銀魂ここで終わっちゃう。

「……な、なぁ？愛紗ちゃん？あのさ、俺も悪かったからさ。これからはちゃんと仕事するから、ね？こんなことしてたら街の人達の評判も悪くしちゃうし」

ということで、仕方無く俺は某〇下〇義さん宜しく決死の交渉船にうってでることにした。神よ！ギブ・ミー・パワー！！

「……確かにそうですね」

すると、奴は今まで垂れ流していた殺気を少し収め、冷静に返してきてくれた。サンキューゴット！今度からは、お賽銭五円玉じゃなくて五十円玉出すわ俺！！

「そうです……、これはあくまで私の勝手なものです。……こんなことをやっても……悪いことこそあれ……良いことなど一つも……」

奴は完全に武器をおろすと、そのままブツブツと何かを語り出した。よし、ここで一気に畳みかけて……！

「そうそう！な？そうだろ？こんなことやったって俺達の評判悪くなるだけでなんだって～。だから帰ろ？銀さんと一緒に――――」

「いけませんか……？」

「……え？」

その時だった。気のせいか、奴の声色が変わった。

「今まで、さんざん悔しい思いをしてきて……やっと出会えた希望の光が……いつもいつもいつもいつもいつも寝てばかり、サボってばかり、ぐーたらばかり……頼んだ仕事も再三頼んでようやくやっと……懲錬すればおふざけばかり……お守りをしなければすぐにどこかへ消えてしまう……枝毛は増える、肌は荒れる……」

「え、え～～っと、愛紗……さん？」

「いけませんか……？私が……私が我を忘れて怒っては……」

「　！　」

ゾクリ。背筋に冷たい殺気が走った。その瞬間。

「いけないんですかぁ～～～～～！！！」

まばたきしていたら、殺られていただろう。奴は瞬時に俺の目の前まで距離をつめてくると、泣きながらその凶器をふるってきたの

だ。

「うをぉぉおお！！？」

たまらず木刀で正面から受ける俺。しかし、奴はそんなことはお構いなしに、それこそ駄々っ子のように次々とすさまじい威力の斬撃を繰り出してきた。

「期待しているのに！！頑張ってほしいと思ってるのに！！いつもいつもいつもいつも、のらりくらりと適当なことばかり並べ立てて！！」

「ち、ちょ、待って、待てって！」

い、いかんコレはちょっとシャレにならなくなってきた……

「桃香様も、鈴々も、みんなみんなみんなぁぁああ！！」

「ぐッ……！」

足場が悪いせいかウマく受け流しきれねぇ……！つーか、どんな怪力して———

「私……は……うわぁぁあああん！！」

ガキィィイン！！

とうとう俺は目の前で泣き叫ぶ奴……愛紗の猛攻を受け流し

きれずに、木刀が弾かれてしまった。……て、あれ？コレ本気でヤバ――――

ズガァァアアン！！

すさまじい破壊音と土煙りがあがった。

第十三訓：武将だって悩んでる（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか？今回の銀さんナレーション。好評だったら、このまま続けていってもいいかな？と思ってるんですけど……。ていうか、銀さん
もうダメ過ぎて書いててちょっとムカついてきちゃったよ……。
でも、たぶん坂田銀時って人間を表すとこんな感じになっちゃうよな～どうしても……ってそんな作者のグチはどうでもよくって……

実は作者またまた、この作品の行く末に迷っています。すいませんホント（泣）
前回たくさんのご応募をいただいたので、また今回皆さんからアンケートを取りたいと思っちゃって……ホント何やってんだろね。
つか、前回のアンケート結果活かされてねーし、今ん所……

て、こんな感じでダメだらけなんですけど、よかったらお答ください。

え～、それでは本題。作者が迷っている今後の展開……それは……

このまま蜀ルートで行っちゃっていいんでしょうか？

はい、バカです。キーワード検索に蜀ルートって載せてあるのに、

今更何言ってんだよです。

しかし……すいません。このまま、蜀ルート一本で行ってしまうとどうしても
信条的に銀さんの価値観と合いそうもない感じの所が出てくるんですよね……
ようは、いい意味での『偽善』です。蜀ルートは最終的にこの信条のもと動いていってしまうので、どうしても銀さんの価値観と合わないところが出てくるんですよね～。

ということで、質問です。

このまま、蜀ルートを貫きとうして、なんやかんやで銀さんに本気モードになってもらうか

作者が考えたオリジナル展開に沿って、話を進めていくか

どういう感じがいいと思いますか？できれば、感想と一緒にお答えください。

すいません、長くなりました。

第十四訓：社会のルール舐めんなマジで（前書き）

どうも！いや～、今回はちょっと意味の分からないところがあるかもしれません。
ちょっと、愛紗さんの心理描写でも入れてみようかなと思ったらこんな展開に……ホントすいません。

あと、前回皆さんにお聞きしたこれからの方針が決定しました！
後書きで発表します！！

第十四訓：社会のルール舐めんなマジで

自分は正しいと思っていた。
国が腐り果て、人の心が枯れ果て、終わり果てようとする世界の中で生きながら自分は正しいことをしていると思っていた。
信じて疑わなかった。
自分が手を差し伸べる先には必ず笑顔が生まれたし、自分が振るう刃は必ず『悪』を切り裂いた。
自分が正しいと思っていた。
今日も、明日も、その先も自分は多くの人を救い、そして正しいことをしたと笑顔になる。
それが正義だと思っていた。
例えそれが自己満足のような小さなことでも、そうし続けることこそが正しいと思っていた。
そう決めつけていた。

「あなたの力はもっと多くの人を救えると思います！」

そう言ったのは、自分よりもはるかに弱くて、小さな人だった。

その人は弱かった。
力もなく、知識もなく、刃もなく、足はいつでも震えていて、その手はとても小さくて、触れれば折れてしまいそう。

誰かが守ってやらなくてはダメだった。誰かが力にならなくては何もできなかった。誰かがそばにいなくては消えてしまいそうだった。

だから、その人は言った。
力を貸して下さいと。涙を溜めて、震える体で、単なるワガママで、その人は言った。

ああ、なんて馬鹿なんだろう。どうして、そんなことを言うんだろう。
あなたは弱いのだから、自分が守ってあげますよ。さぁ、自分の手の中に来て下さい。そうした方がいいですよ。

でなければ、あなたは死んでしまうのだから。

そうだ、弱いあなたは守られなければ死んでしまう。さぁ、どうかこの手を握って下さい。そうすれば、私はあなたを守って差し上げましょう。そうすれば、また笑ってあなたは暮らせるのでしょう？そうすれば、また幸せに生きられるのでしょう？

さぁ、この手の中に来て下さい。私が、あなたを守ってあげる。

「それでも……それでも私は皆を助けたいんです！！」

その人は私の手の中には来なかった。

その人は私の手を牽いた。

その人は前を向いていた。

どうして？どうして、前に向かっているの？

そっちは危ないよ。死んでしまうかもしれないよ。

後悔するよ？何もできないかもしれないよ？泣いてしまうかもしれないよ？

どうして、どうして、どうして、どうして、どうして……

……ソンナトコロニイクノ？

「……私にはそれしかできないから」

その人は笑顔だった。

自分は正しいと思っていた。

終わり果てようとする世界の中で、目の前の笑顔を救うことが自分の正義だと信じてきた。

そして、それは今でも変わらない。

私は剣をふるおう、その笑顔の為に。私は涙を流そう、その笑顔が曇る度に。

その人の為に……私は生きよう。

……桃香様、私は———

街は喧噪に包まれていた。
大通りでは、先ほどの嵐のような逃走劇の余波を受けた露店や通行人たちが未だにごった返しており、さらにはそんな騒ぎを聞きつけた野次馬も建物から出てきてしまい、まるで出来の悪いお祭りのような有様になってしまっていた。

「……ふむ、これは少々エライことになってしまっているようだな」

そんな喧噪の上。通りに面した雑貨屋の屋根の上から、そんな冷静な声が聞こえた。
声の主――白い衣を際どく着こなし、青い髪を風に靡かせた少女、星は普段のポーカーフェイスをややしかめさせながらこの騒ぎを眺めていた。

「う～む、急いで来てみたは良いが……これは、私は手を出さない方が得策か」

星は混乱して身動きが取れなくなってしまった人々を見ながら、ふぅと溜息をついた。

大通りの人々の様子はパッと見は、まるで2週間前の黄巾党襲撃を思わせるものであったが、よく見ればそれとは少し違ったものであった。

例えるなら、山羊の群れ。一匹の不安がすべてに伝染して意味もなく鳴いている、そんな状態だった。これでは、中途半端に声をあげれば、なにかしらの勘違いが生まれて、余計に混乱してしまう恐れがあった。こういう時は、根気よく人々の全てが等しく事態を理解するまで、説明し続けなければならないだろう。

そして、星にはそんな悠長な時間は残されてはいない。

（仕方ない、ほかのものに任せるか……）

星は大通りの混乱から目を離すと、その先、屋根の上で未だ呆然と佇んでいる黒い髪の少女を見た。

「……やれやれ、素直になれないのにもほどがあるだろう、関羽殿」

星は再び溜息をつく。

そんな混沌とした大通りから外れて、ここは裏通り。

大通りの喧噪とは違い、ここには今人が少なかった。というのも、大通りの騒ぎにつられて人がそちらに流れて行ってしまっているからなのだが。

今ここには、その騒ぎを気にかけながらも、面倒事に巻き込まれたくない消極的な人や、そもそも興味のない冷めた人しかいないとあって、少し淋しいくらいに静かであった。

そんな裏通りの一角。裏通りから表通りへと繋がる家と家との間の細い路地裏に、全体的に赤を基調とした服を着た小柄な少女と、その少女よりもさらに小柄でその小柄な体にある意味ピッタリな、大きな山高帽子を被った少女がいた。少女たちは、まるでどこかのプレーリードックのようにビクビクと大きな箱の陰に隠れながら、ソーッと大通りの方を観察していた。

まぁ、小柄な少女たちでは、大通りに繋がる入口の前に陣取っている野次馬の陰に隠れてしまって、騒ぎが起こっているな〜ぐらいにしか状況は分からないのだが……。

「はわわ、やっぱりなにか大変なことが起きちゃいました……」

赤い服の少女が、もう神経質なくらい声を小さくさせながら、あたふたと言った感じで言った。

「あわわ、どうしよう朱里ちゃん……」

すると、それに応えるようにもう一人の山高帽子の少女が、さらに小さく震えた声で赤い服の少女――朱里に尋ねる。目にはうっすらと涙すら溜めており、まるで生まれたての雛鳥のような不安が手にとるように感じられた。

「はわ……じゃなくて。う、うん大丈夫だよ雛里ちゃん！」

そんな少女――雛里の様子を見たからだろうか。今まで、同じように不安そうにしていた朱里が、急に胸を張って力強く応えた。

どうやら、この2人の関係はそういう感じでまかり通っているら

しい……。

「しゅ、朱里ちゃん……」

雛里はそんな朱里の、傍から見れば虚勢にしか見えないだろう声にも安心を覚えたのか、先ほどまで不安そうだった表情に少しだけ笑みを浮かべた。

そんな妹のような雛里の為か、朱里は小さく握りこぶしを固めると、改めて大通りの状況を観察しだした。雛里もその下で、まるでトーテムポールのように重なりながら状況を観察し始める。

……正直、可愛い以外の表現方法が思い浮かばない画である。

「……思ったよりも、騒ぎは広がってないみたいだね」

しばらく観察すると、朱里はポツリと呟く。

「う、うん……なんだか、困ってるみたいな感じだね」

雛里も朱里の懐に隠れながら、状況をいち早く理解したようだ。

大通りの様子は見た目こそ混乱しているが、その本質は単なる『驚き』である。

突然風が吹いて、品物がどこかへ飛ばされてしまった、どうしようみたいなそんな単純なもの。

特に怯える理由もない。だけど、どうしたらいいのか分らない。そんな中途半端な混乱が拡大したものが今の大通りの状況であった。

争い事ではないと分かり、少しホッとする2人。

「でも、このままじゃあすぐにもっと大変なことになっちゃうよね……」

しかし、すぐに表情は曇る。そうだ、混乱が起きている以上、なんとかしないといけないのは物事の当然の道理である。

「……うん」

雛里が山高帽子の端をキュッと握った。

「……じゃあ、行こう雛里ちゃん」

「うん……！」

そして、2人は動き始める。

もうすでに、頭は回転し始めた。頭に地図を描きだす。寸分違わず、道の一つも取りこぼさずに。

兵士はどこを通るのか。どこに行けば、一番自分達の力を発揮することができるのか。

立ち上がり、一歩を踏み出す瞬間には、2人の頭の中には完全な作戦が完成していた。

しかし、その瞬間――

ドッカァァアアン！！

2人の背後が突然爆発した。

「「ふ、ふぇぇぇえ！！？」」

当然2人は仲良く前のめりにすっ転び、まぁ、そのなんというか……ペロ～ンとなった。

「な、ななななな！！？」

「ふえ！？ふえ！？」

パニックに陥る二人。それはそうだろう。この小動物コンビでなくとも、自分の周りで爆発が起きれば誰だってパニックに陥る。誰だって、ペロ～ンのことなんて気にしていられない。

モクモクと立ち上る土煙り。どうやら、先ほどまで隠れていた箱が爆発したらしかった。その事実が余計に2人に恐怖を与えていた。ガクガク、プルプル、ペロ～ン。2人は声も出せずに震えきっていた。

その時――

「う、う～～～ん……」

土煙りの中から、なにかモゾリと這い出てきた。

「「ひぅ……ッ！」

2人そろってお互いの体に抱きついた。そして……

「ゲホッ、ゴホッ、ガハッ、オエェ！あ～、死ぬかと思った……」

なんか頭がモジャモジャ通り越して、チリチリになっている銀髪の男が目の前にいた。

第十四訓：社会のルール舐めんなマジで（後書き）

いかがでしたでしょうか？いや～、つくづくプロの人がすごいと分かりましたね……。一応今回かなり本気で書いたのですが、もうグダグダですよ、ははは……はぁ～～。

と、作者のグチはこのぐらいにして、はい！お待ちかねのルート決定結果発表です！！

え～、ズバリ。これからの展開は、『オリジナル』です！

いや～、もうホント僕なんかのオリジナルに期待しちゃってからに～、もうホントありがとうございましたッ！！

頑張って書きますので！！どうか感想もお願いします！！

あ、あと本当にできればなんですけど、もう一つの小説『バカ魂』の方もよろしくお願いします。いやホント、全然感想来なくてね……（泣）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6594m/

真・恋姫無双～白夜叉大乱～

2010年11月5日21時09分発行